©2011練馬区ねり丸

全国都市農業フェスティバル

全国都市農業フェスティバル　記録集

全国都市農業フェスティバル 記録集

主催 ｜全国都市農業フェスティバル実行委員会　練馬区

練馬区

全国都市農業フェスティバル 記録集

開催日時：令和5年11月19日（日）10:00～16:00
会　　場：都立光が丘公園、区立光が丘体育館

目 次

開催の趣旨 …… 2
1. 被招聘都市および参加都市 …… 4
2. 当日プログラム（11月19日） …… 9
3. 前日プログラム（11月18日） …… 20
4. 開催までの取組～フェスティバルの機運醸成企画～ …… 26
5. 巻末資料
　5-1. 被招聘者一覧 …… 31
　5-2. トークライブサマリー …… 32
　5-3. 意見交換会サマリー …… 50
　5-4. フェスティバルの広報 …… 64
　5-5. 委員名簿 …… 70

※掲載している都市の順番は、原則練馬区から距離の近い順となります。

開催の趣旨

練馬区は、大都市東京の都心近くに位置しながら豊かな自然に恵まれ、住宅地の中で市民生活と融合した生きた農業が営まれています。都市農業は、都市生活に新たな豊かさをもたらすものであり、練馬区の誇りです。この農業と農地を守り、次世代に引き継ぐことが区の重要な責務です。

令和元年度に開催した「世界都市農業サミット」では、参加都市から「練馬の都市農業は言わば我々が目指すべきモデル」とコメントをいただきました。

全国都市農業フェスティバルは、サミットで確認した都市農業の魅力と可能性を参加自治体と一体となって発信し、相互に学び合い、都市農業の発展に繋げていくため、また、お招きした国分寺市、松戸市、名古屋市、京都市をはじめ、都市農業に積極的に取り組む自治体とともに都市農業を更に飛躍させる契機とするために開催しました。

目的

1 **都市農業の魅力を発信し、都市農業への理解促進や更なる振興を図る。**

都市農業の魅力を体感できる機会を提供することで、都市農業への理解を促進し、更なる振興につなげる。

2 **農業者の営農意欲の向上や、都市農業に対する誇りの醸成を図る。**

全国の都市農業者の取組に着目し、その意義や魅力を共有することで、営農意欲の向上や都市農業に対する誇りの醸成につなげる。

3 **全国の自治体・農業者・農業協同組合同士が、知見や経験等を共有し相互に学ぶことで、都市農業の発展に向けた新たな取組につなげる。**

都市農業振興に積極的に取り組む全国の自治体・農業者・農業協同組合が、直接集い参加することにより、自治体間を超えた連携・協力関係を構築する契機とし、新たな取組につなげる。

来場者数

約36,000人

うち参加型プログラム
- 体験する（ワークショップ）　計9回開催　延べ250人参加
- 話す・学ぶ（トークライブ）　計2回開催　延べ800人参加

1. 被招聘都市および参加都市
2. 当日プログラム（11月19日）
3. 前日プログラム（11月18日）

練馬区の都市農業

東京23区の農地の約4割があり、都心近くに立地しながら市民生活と融合した生きた農業が営まれている練馬区。

区内には約270か所の庭先直売所があり新鮮な農産物を手軽に購入できるほか、農業者団体が行う「マルシェ」等では、農業者との交流を楽しむこともできます。農業者から直接、一連の農作業を学べる「農業体験農園」は練馬区発祥で、農園数および区画数共に全国最多です。

また、果樹の摘み取りができる農園「練馬果樹あるファーム」、気軽に野菜の収穫体験が楽しめる農園「ねりまベジかるファーム」などでは、「身近に農のある暮らし」の魅力を感じることができます。

「ねりまベジかるファーム」での収穫体験

農業者と交流できる「マルシェ」

基礎情報
- 面積：48.08km²
- 人口：739,193人
- 農家戸数：415戸
- 農地面積：184ha（うち生産緑地地区面積：157ha）

主な農産物
- キャベツ
- ダイコン
- ブロッコリー
- カキ
- ブルーベリー

※面積・人口は令和4年12月1日現在

1 | 被招聘都市および参加都市

被招聘都市

全国の都市農業に積極的に取り組む自治体のうち、東京都内および三大都市圏（首都圏・中部圏・近畿圏）から1都市ずつ、計4都市を招聘しました。

※面積・人口は令和4年12月1日現在

東京都内 国分寺市

江戸時代中期の新田開発の時代から約300年の農の歴史を持ち、現在では市内全域で農業が行われている国分寺市。

市内には約60か所の庭先直売所があり、その日の朝に畑で収穫した採れたて野菜・果物・花などが並びます。有人、無人、コインロッカー式など様々な形態の直売所は、農業者の個性を感じられます。

また、市内農家が販売を目的に生産した農畜産物を「こくベジ」の愛称でブランド化し、こくベジプロジェクトとして、こくベジとこくベジを使った飲食店のPRを通じて、市内外から人を呼び込み、こくベジの消費拡大や地域活性化に取り組んでいます。

こくベジプロジェクト

交流の場になる直売所

基礎情報
- 面積：11.46km²
- 人口：128,401人
- 農家戸数：176戸
- 農地面積：134ha（うち生産緑地地区面積：116ha）

主な農産物
- トマト
- ホウレンソウ
- エダマメ
- ナス
- ブルーベリー

首都圏 松戸市

都心から約20km、電車で約30分の距離に位置し、首都圏の住宅都市として発展してきた松戸市。

現在は、大消費地に近い立地条件を背景に、一定の基準を満たした農産物であることを示すマーク「みのりちゃん」を活用してブランド化を推進しています。深い香りと辛味がある「あじさいねぎ」や市場に出回らない希少な「まつどの梨」などブランド力の高い農産物を多数生産しています。

令和元年に、「ねぎ」の魅力を全国に発信する「全国ねぎサミット2019 inまつど」を開催しました。

全国ねぎサミット2019 inまつど

深い香りと辛味がある「あじさいねぎ」

基礎情報
- 面積：61.38km²
- 人口：496,954人
- 農家戸数：662戸
- 農地面積：677ha（うち生産緑地地区面積：125ha）

主な農産物
- ナシ
- イチゴ
- あじさいねぎ
- 矢切ねぎ
- エダマメ

中部圏 名古屋市

日本のほぼ中央に位置し、人口が230万人を超える中部地方の政治・経済・文化の中枢都市である名古屋市。

名古屋の玄関口である名古屋駅は1日100万人以上の乗降客でにぎわいます。

名古屋の農家が作った野菜「なごやさい」を、市内に約30か所ある「朝市・青空市」等で定期的に販売しているほか、スタンプラリーの実施やJAによる移動販売車での販売などにより、地産地消を推進しています。

また、八事五寸（やごとごすん）にんじんや大高菜（おおだかな）などの伝統野菜のPRにも力を入れており、令和5年には新たに「徳重だいこん」が「あいちの伝統野菜」に追加選定されました。

新鮮な野菜を届ける移動販売車

復活した伝統野菜「徳重だいこん」

基礎情報
- 面積：326.5km²
- 人口：2,325,946人
- 農家戸数：515戸
- 農地面積：1,030ha（うち生産緑地地区面積：224ha）

主な農産物
- トマト
- ダイコン
- ハクサイ
- タマネギ
- ブロッコリー

近畿圏 京都市

京都府最大の都市であり、794年から1000年以上にわたって都が置かれるなど、歴史の中で日本の中心として栄えてきた京都市。市域面積の77%を農地と森林が占め、古くから多種多様な農林産物が生産されてきました。

恵まれた地形と気候のもとで古くから生産されてきた京野菜には、豊かな食文化を支えてきた「賀茂なす」「九条ねぎ」などの伝統野菜や、新しく生まれた「京の黄真珠」「京ラフラン」といった新京野菜などがあります。また、農家が自ら販売して回る「振り売り」等により、新鮮な野菜を市民の皆様に届けています。

色とりどりの京野菜

伝統的な販売方法「振り売り」

基礎情報
- 面積：827.8km²
- 人口：1,448,287人
- 農家戸数：2,800戸
- 農地面積：2,390ha（うち生産緑地地区面積：509ha）

主な農産物
- 九条ねぎ
- みず菜
- 京たけのこ
- 壬生菜
- すぐき菜

参加都市

全国から20自治体がフェスティバルに出展し、各自治体の農産物や特産品を販売。
また、各自治体での都市農業についてPRを行いました。

※本ページはフェスティバル当日に会場に展示した自治体紹介パネルを再構成しています。(データは令和5年3月現在)

世田谷区

総人口:917,705人
総面積:58.05㎢
農地面積:90.4ha
【主な農産物】ダイコン、ジャガイモ、コマツナ

<農福連携の取組み>

区内の農地保全と障害のある方の就労促進・工賃向上を図るため粕谷2丁目の約3,400㎡の農地で農福連携事業に取り組んでいます。障害者の就労を伴う圃場管理のほか農作業体験会や地域との交流事業なども行っています。

<せたがやそだちビジネスプランコンテスト>

せたがやそだち(世田谷産農産物)の魅力発信と農家の販路構築につながる新たな農業ビジネスの展開を促進するため、せたがやそだちを使った加工品のビジネスプランを募集し優秀なプランに補助金を交付し商品化を支援しています。

立川市

総人口:185,242人
総面積:24.36㎢
農地面積:243.2ha
【主な農産物】ウド、トマト、ブロッコリー、ニホンナシ、キウイフルーツ他

<立川産農産物ブランド「立川印」>

立川農業の価値と魅力を広めるため市内農業者の横断的組織である立川農業振興会議から推薦された10名の農業者が中心となり計9回延べ約30時間にわたるワークショップ形式での検討を重ねてブランドマークが決定しました。

<小学校での食育・緑育授業>

市内の若手農業者団体の立川農研会への委託事業。食育は学校の栄養士と協力し給食で使用する野菜を紹介し生産者の立場から食の大切さを伝え緑育は校庭内の樹木名プレートの製作や樹木配置図を設置しクイズ形式で授業を行っています。

日野市

総人口:187,045人
総面積:27.55㎢
農地面積:132.6ha
【主な農産物】ナシ、トマト、ブルーベリー、ブドウ、ナス

<学校給食地元農産物供給事業40周年>

市内全小中学校の給食で地元農産物を使用。2023年は地元野菜が使われ始めてから40年目。全校自校方式で作られる学校給食には「子ども達に新鮮な野菜を食べさせたい」という農家と栄養士の熱い思いが込められています。

<援農市民養成講座「農の学校」>

高齢化する農家の担い手不足を解消するため、援農ボランティア養成講座「農の学校」を毎年開校。1年間の講座で知識と技術を習得した修了生は援農ボランティアとして市内農業者のもとで活躍しています。

川口市

総人口:604,715人
総面積:61.95㎢
農地面積:389ha
【主な農産物】植木を中心とした花き等

<市役所マルシェ>

川口産農産物のPR・消費拡大を図るため、市役所庁舎において定期的にマルシェを開催します。とれたて新鮮な農産物が買えるほか川口ならではの魅力的な商品やお店が出店し都市住民と農のふれあいの場を提供します。

<川口農業ブランド制度>

川口市内の農業者によって生産された特に優れた農産物を"川口農業ブランド"として認定する川口農業ブランド制度の取組を支援。審査を経て認定された農産物の信頼性向上や都市住民の農業への理解・関心を深める機会を創出します。

さいたま市

総人口:1,340,923人
総面積:217.43㎢
農地面積:4,269.09ha
【主な農産物】サツマイモ、花き

<プチマルシェ・農業祭の開催>

さいたま市では毎月19日を「地産地消の日」と定め 市役所庁舎や公園にて市内産農産物のプチマルシェを開催しています。また毎年11月にはさいたま市農業祭を開催し多くの来場者に市内産農産物をPRしています。

<子ども農業体験>

さいたま市内にある生産者団体とともに子どもたちへの農業体験事業を実施しています。さいたま市の特産品であるくわいの「バケツくわい体験」や西区の「田植え体験」など子どもたちの貴重な体験は食育にも役立っています。

所沢市

総人口:343,867人
総面積:72.11㎢
農地面積:1,691.7ha
【主な農産物】狭山茶、サトイモ

<所沢市最大の農業の祭典 所沢市農業祭>

農業祭では 市内の各農業者団体が一堂に会し野菜・狭山茶・植木・畜産物といった所沢市の魅力ある農産物などをPRし販売します。また各種品評会の開催をはじめ、農業にちなんだ様々な催しを行います。

<狭山新茶を満喫 ところざわ新茶まつり>

所沢市の特産品である狭山茶の美味しい新茶をどこよりも早く堪能できるまつりです。例年、新茶の予約販売・即売・手揉みの実演・美味しいお茶の淹れ方教室など狭山新茶の魅力を網羅した充実のコンテンツを展開します。

川越市

総人口:352,986人
総面積:109.13㎢
農地面積:3,591.6ha
【主な農産物】サツマイモ、サトイモ

<くらしをいろどるFarmer's Market>

毎年12月の第一日曜日に開催している当イベントは豊かな川越の土壌で育った農産物を存分にPRすることを目的としており市内農業者・飲食店等が出店し、川越産農産物やそれを使用した料理等を販売しています。

<川越市グリーンツーリズム拠点施設>

農業とのふれあいをコンセプトとしたグリーンツーリズムを推進する「蔵inガルテン川越」事業の一環として川越市グリーンツーリズム拠点施設があります。体験農園やバーベキュー場などを通じて市民が農のある生活を楽しむ場を提供しています。

行田市

総人口: 79,324人
総面積:6,749㎢
農地面積:4,232.5ha
【主な農産物】米、麦

<田んぼアート米づくり体験事業>

本事業は農業への理解醸成や食育の推進を図るとともに県内有数の米産地としての本市のPR及び市内観光の1拠点となっています。また、田植え・稲刈り時には農業体験コンテンツとなり、見頃時期には観光コンテンツとなります。

<「行田はちまんマルシェ」事業>

地産地消の推進や地域の活性化を目的として毎週日曜日に開催。採れたての新鮮な行田野菜や手作りのクラフト品・食べ歩きできる軽食など様々な店舗が出店。出店者の情報や会場の様子などは、行田はちまんマルシェ公式Instagramで配信しています。

川崎市

総人口:1,538,998人
総面積:143.01㎢
農地面積:510.7ha
【主な農産物】ナシ、トマト、キュウリなど

<かわさきそだち栽培支援講座>

川崎市内の野菜や果樹等の生産安定を図ると共に労働力の確保・都市住民との交流を推進するため生産者への援農(手伝い)を目的とした講座を市民対象に開講しています。

<花と緑の市民フェア>

都市農業の振興や地産地消の推進及び都市緑化を促進することを目的として開催しており、内容としては、花の品評会出品物の即売会・市内産農産物・加工品等の販売などを実施しています。

横浜市

総人口:3,769,595人
総面積:438.01㎢
農地面積:2,761ha
【主な農産物】キャベツ、キュウリ、ジャガイモ

<企業等と連携した市地産地消の推進>

地産地消を広げるため、地産地消のPRイベントの開催や、市内産農畜産物を使用した商品の販売等、企業等と連携した取組を推進しています。

<地産地消を広める人材の育成 ～はまふぅどコンシェルジュ講座～>

座学・農作業・販売等の実習など全5回の講座を修了した方を「はまふぅどコンシェルジュ」として認定し、市内各地での地産地消に係る活動を推進しています。(令和5年現在476名が認定)

相模原市

総人口:724,724人
総面積:328.91㎢
農地面積:1,938ha
【主な農産物】ダイコン、サトイモ、ハクサイ

<「さがみはらのめぐみワイン特区」の取得と活用>

国から構造改革特区の認定を受け、市内産の特産物を原料とする場合に、果実酒やリキュールの最低製造数量基準を引き下げることが可能となり事業者が参入しやすい環境を構築。これにより令和5年4月に「相模原ワイン」が誕生しました。

木更津市

総人口:136,231人
総面積:138.9㎢
農地面積:2,430ha
【主な農産物】水稲

<学校給食提供に向けた有機米プロジェクト>

令和元年より市内公立小中学校の学校給食へ、有機的なお米を提供する有機米プロジェクトを実施しています。毎年新米の提供初日には生産者と一緒に給食を食しどのように有機的お米が作られたか食育授業をしています。

坂東市

総人口:51,099人
総面積:123.03㎢
農地面積:5,800ha
【主な農産物】ネギ、レタス、トマト

<首都圏において地域農産品のPR>

地元農家や農協等から直接仕入れた新鮮な農産物を食べてもらうことで、首都圏の皆様に坂東市の農産物をPRし、市について知ってもらうことが目的。令和5年度7月現在神田・練馬・日本橋のイベントに参加し首都圏の皆様に向けPRしました。

<農業祭において地産地消の促進>

毎年4月に市で開催される逆井城まつりに合わせて農業祭を開催。JAや普及センター4Hクラブ等の団体の協力のもと、生鮮野菜や地元の農産物を使用した料理を販売し、市民の農業への理解を深めることと地産地消の促進を目的としています。

上田市

総人口:152,986人
総面積:552.04㎢
農地面積:5,250ha
【主な農産物】米、レタス、リンゴ

<日本の棚田百選「稲倉の棚田」>

平成11年に「日本の棚田百選」に認定された、上田市殿城地区の「稲倉の棚田」は 稲倉の棚田保全委員会を中心に保全活動が進められています。棚田オーナー制度や「ししおどし祭り」「棚田CAMP」など先進的な取組が行われています。

<信州上田ないろ農産物>

上田市は年間降水量が少なく日照時間が長い寒暖の差が激しい野菜や果物の生産に適した気候風土。上田市ではこれを「信州上田ないろ農産物」と銘打ちPRを進行。近年ではワインの生産も増加しており世界的な賞も受賞しています。

浜松市

総人口:781,596人
総面積:1,558.06㎢
農地面積:14,154ha

【主な農産物】
ミカン、茶、セルリー

<浜松パワーフード>

農産物約170種類・水産物約150種類の食材があり、浜松で17年間過ごした徳川家康の躍進を支えたのもこの食材。「健康寿命日本一」を支える旬の食材「浜松パワーフード」のすばらしさを皆様に知っていただく活動を行っています。

<農業経営塾>

浜松の農業経営者や農業経営をコンサルティングする人材の育成を目的にリーダーシップや組織管理マーケティング等を身につける農業経営塾を開催。令和5年度まで実施し、78人が受講。また、受講後に専門家によるフォローアップも行っています。

知立市

総人口:71,917人
総面積:16.31㎢
農地面積:377ha

【主な農産物】
米、麦、大豆

<畑de学校(小中学生対象)>

土を耕し野菜を育て収穫するまでの一連の農体験。土に触れ野菜が育つ過程を観る、調理する等、互いに協力して様々な体験を通し「農」や「食」への関心を育みます。遊休農地対策として「ローゼル」を植付し学校給食で提供する等地産地消を目指します。

<体験農村かきつ畑♪>

「日本で一番小さくて楽しい農村を創るプロジェクト」体験農村かきつ畑は、参加者と一緒に作る体験型農園。農は人を作り、そして仲間を作る。参加者が各自の区画で野菜をつくり収穫を楽しむだけではなく参加者同士の交流を広げています。

四日市市

総人口:309,051人
総面積:206.50㎢
農地面積:4,580.9ha

【主な農産物】
茶(かぶせ茶)、米

<農業振興の拠点、農業センター>

農家の皆さんが気象データに基づいて栽培管理が出来るよう気象センサーを設置、データの蓄積・解析に取り組んでいます。また、市民が農業を身近に感じることができる拠点として農業マルシェや園芸教室等を開催しています。

<企業の農業参入を支援>

農業の担い手不足が進行している中で多様な業種の企業が集積している四日市市の特徴を生かし、新たな担い手確保のための施策の一つとして企業が新たに農業参入する際に行う施設整備や機械導入を支援しています。

大阪市

総人口:2,756,807人
総面積:225.33㎢
農地面積:76.40ha

【主な農産物】
米(ヒノヒカリ)、軟弱野菜、花き等

<大阪市内産農産物の産地ブランド化>

大阪市内で100年以上前から栽培されている「大阪市なにわの伝統野菜」や大阪にイタリア料理店が多いことに目をつけた大阪市内でのイタリア野菜の栽培等、大阪市内産の野菜の産地ブランド化をめざして取り組んでいます。

<大阪市都市農業振興事業>

大阪市内の都市農業の魅力をプロモーション動画や農産物の旬の時期に合わせた魅力発信イベント・農業体験イベント等にてPRしています。SNSを活用した積極的な広報を行い、プロモーション動画はYouTubeチャンネルで公開しています。

神戸市

総人口:1,504,597人
総面積:557.3㎢
農地面積:5,076.4ha

【主な農産物】
水稲、軟弱野菜

<資源循環型「こうべ里山SDGs農業」の推進>

下水処理の過程で回収されたリン(こうべ再生リン)を配合した肥料「こうべハーベスト」や堆肥の利用支援を行い資源循環・環境保全型の「こうべ里山SDGs農業」を推進。肥料価格高騰の影響を受ける農業者を支援し持続可能な農業経営を目指しています。

<マーケットの開催>

日常的に神戸産農水産物を購入できる地産地消の場として市街化区域で開催するマーケットを支援。生産者の農産物を使った加工品を販売する事業者等マーケットを通じたつながりも生まれています。

広島市

総人口:1,181,868人
総面積:907㎢
農地面積:3,369ha

【主な農産物】
広島菜、コマツナ、パセリ

<広島近郊7大葉物野菜>

「こまつな」「サラダみずな」「しゅんぎく」「パセリ」「ほうれんそう」「青ねぎ」「広島菜」を“広島近郊7大葉物野菜”と命名し積極的にPR。「広島菜」は日本三大菜漬けの1つ「広島菜漬」の原菜として一説には江戸時代から栽培されています。

<ひろしま朝市>

地産地消と都市農村交流を促進するため、毎週日曜日に広島市内の農林水産業者が平和大通りの一角に集い、朝市を開催しています。

2 | 当日プログラム(11月19日)

会場MAP

会場では、「買う」「食べる・体験する」「話す・学ぶ」の3つをテーマに、都市農業の魅力を存分に感じられる様々なイベントを開催しました。

全国都市農業フェスティバル

- 1〜3 4・5 国分寺市
- 6・7 8 松戸市
- 9・10 名古屋市
- 11 おはしごはん
- 12・13 京都市
- 14 新花
- 15 立川市 × AMASIO KITCHEN
- 16 世田谷区
- 17 日野市
- 18 川口市
- 19 さいたま市
- 20 所沢市
- 21 川越市
- 22 行田市
- 23 川崎市
- 24 横浜市
- 25 相模原市
- 26 坂東市
- 27 木更津市
- 28 上田市
- 29 浜松市
- 30 知立市
- 31 四日市市
- 32 大阪市
- 33 神戸市
- 34 広島市
- 35 高知県(東京丸高花き協議会)
- 36 国土交通省
- 37 農林水産省
- 38 東京都(公益財団法人東京都農林水産振興財団)
- 39 伊勢屋 鈴木商店
- 40 中華 大勝軒
- 41 Cafe Truck.7 珈琲の樹
- 42 Bear's PuPu (ベアーズ ププ)
- 43 ガビンパンパン
- 44 呑と
- 45 PITANGO
- 46 ねりま観光センター
- 47 練馬区協働推進課(大泉パティシエクラブ)
- 48 社会福祉法人あかねの会

■ … キッチンカー

JA東京あおば農業祭

- 1〜4 地域内異業種出店
- 5・6 果樹即売
- 7〜12 野菜即売
- 13〜18 JA東京あおば直売所コーナー
- 19〜21 花卉販売
- 22・23 諏訪商会
- 24・25 青壮年部コーナー
- 26〜28 練馬大根販売
- 29 品評会

フォトスポット

会場内には様々な展示が設置され、多くの来場者の目を楽しませました。

フラワーアート

トラクター

モザイクアート

宝船

練馬大根干し

買う

全国からたくさんの農産物・特産物が大集合！

東京都 国分寺市

市内農家が生産した旬の「こくベジ」（地場産農畜産物の愛称）やこくベジオリジナルグッズ（ピンバッジ・前掛け・エコバック）を販売。

こくベジメニュー提供店の「パンの家ラ・ママン」がパンを、洋食店「ラヂオキッチン」がカレーペーストやジャムなどの加工品を販売。

千葉県 松戸市

松戸のブランドねぎである「矢切ねぎ」や「あじさいねぎ」、二十世紀梨発祥の地である「まつどの梨」を販売。

松戸市内で生産された、新鮮な野菜を使用したサンドウィッチや焼菓子も販売。

愛知県 名古屋市

愛知県の伝統野菜に選定された「徳重だいこん」や名古屋で生産拡大中の「アボカド」を販売。

天然有機肥料だけで大切に育てた甘くて美味しいmiuトマトとmiuトマトの加工品も販売。

京都府 京都市

九条ねぎやみず菜など、農家が丹精込めて栽培した旬の京野菜を販売。

京都の長い歴史の中で育まれた味や香りが楽しめる京野菜を販売。

東京都
世田谷区
イチオシ せたベジシフォン

東京都
日野市
イチオシ ルバーブジャム

埼玉県
川口市
イチオシ シクラメン

埼玉県
さいたま市
イチオシ ヨーロッパ野菜セット

埼玉県
所沢市
イチオシ 狭山茶

埼玉県
行田市
イチオシ 行田在来青大豆

神奈川県
川崎市
イチオシ のらぼう菜乾麺

神奈川県
横浜市
イチオシ はま柿

神奈川県
相模原市
イチオシ 津久井在来大豆の加工品

茨城県
坂東市
イチオシ ねぎ

千葉県
木更津市
イチオシ きさらづ学校給食米

長野県
上田市
イチオシ ふじ

静岡県
浜松市
イチオシ 三ヶ日みかん

愛知県
知立市
イチオシ ローゼル

三重県
四日市市
イチオシ かぶせ茶

大阪府
大阪市
イチオシ 天王寺蕪

兵庫県
神戸市
イチオシ 神戸野菜セット

広島県
広島市
イチオシ 広島菜漬

イチオシ 各自治体の農業者や出展者がおすすめする農産物・特産物

当日の様子

練馬大根などの新鮮な練馬産野菜、果物、お花のほか、普段目にすることの少ない全国の農産物・特産物を販売しました。

全国の新鮮な農産物・特産物が並び、多くの来場者でにぎわいました。

自治体以外にも様々な団体が出展

国土交通省
「農」や「みどり」に関連するイベントや施設についての情報発信

農林水産省
「みどりの食料システム戦略」や多様な役割を持つ「都市農業」の紹介

東京都（公益財団法人東京都農林水産振興財団）
農林水産振興財団が実施している農林水産業の振興を図る事業や取組の紹介

ねりま観光センター
イベントで大人気の「ねり丸ガチャ」が登場

社会福祉法人あかねの会
ねりコレに認定された「野菜たっぷりスープ」などを販売

練馬区協働推進課（大泉パティシエクラブ）
区内農産物を使用したフェスティバル限定のお菓子詰め合わせセットを販売

高知県（東京丸高花き協議会）
高知のお花を使ったフラワーアレンジメントを実施

第26回 JA東京あおば農業祭と共同開催

※JA東京あおば農業祭　11月18日（土）、19日（日）開催

食べる

各地の農産物を使った様々な
メニューを提供するキッチンカーが出店！

農 区内農業者のオススメ飲食店
食 ねりまの食育応援店

食育応援店について

練馬を味わう

伊勢屋鈴木商店 農

イチオシ ネリマーレン ブルーベリープロイ

フルーティーな香り、引き締まった酸味とほのかな甘みが特徴の発泡酒。

中華 大勝軒 農

イチオシ アントン餃子

地場産野菜をたっぷり使用したアントン餃子を販売。

Cafe Truck.7 珈琲の樹 農

イチオシ ホットドッグ

ボリューム満点のホットドックに加え、淹れたて珈琲、かき氷やチーズケーキも販売。

Bear's PuPu（ベアーズ ププ） 農

イチオシ タコス

生地から作る自家製トルティーヤ。市販のものとは香りが違います。

ガビンパンパン 農

イチオシ ドレッシング

練馬産野菜のドレッシングに加え、旬の野菜をたっぷり使った豚汁も販売。

呑と 農

イチオシ 長芋のフライドポテト

練馬産の長芋を使用したフライドポテトを販売。

PITANGO 食

イチオシ 練馬大根パスタ

練馬の学校給食でおなじみの練馬大根スパゲティをPITANGO風にアレンジ！懐かしい記憶と思い出に。

全国を味わう

Ann Bee | 国分寺市

イチオシ こくベジクッキー

国分寺市で採れた野菜を乾燥させ粉末にしたものをクッキー生地に混ぜ込みました。

欧風カレー工房すぷーん | 国分寺市

イチオシ コロッケカレー

国分寺300年野菜「こくベジ」をふんだんに使用して作る特製のこくベジコロッケカレー。

ATELIER nihaku | 松戸市

イチオシ 焼菓子

松戸市内で栽培された新鮮な野菜を使用したサンドウィッチや焼菓子を販売。

おはしごはん | 名古屋市 食

イチオシ 名古屋コーチンの唐揚げ弁当

名古屋コーチンを使用した、特製の唐揚げをどんぶりに。

新花 | 京都市 食

イチオシ 九条ねぎを使用した自慢の焼売

全国都市農業フェスティバル限定で京野菜を使用したシュウマイを販売。

立川市×AMASIO KITCHEN | 立川市

イチオシ 立川産農産物を使用したお弁当

立川産食材を使用したお弁当のほか、JA東京みどりの「推し」加工品等も販売。

川越市 | 川越市

イチオシ 焼き芋

「川越いも」を使用した焼き芋です。紅はるかとシルクスイートの2種類を販売。

当日の様子

練馬産の野菜をふんだんに使用したメニューのほか、各都市の特色ある料理をたくさんの人が楽しみました。

どの店舗にも多くの方が訪れてくれました。

色とりどり、季節のものをふんだんに使ったおいしい料理が並んでいました。

体験する

都市農業の魅力に触れることができるワークショップ、親子揃って楽しめる体験コーナーを実施しました。

農家さんに聞いてみよう！

練馬区農業体験農園※園主会の農業者が講師となったワークショップを3回開催しました。

各回のテーマは①「プランター栽培のコツ」、②「美味しい野菜とは」、③「練馬の都市農業」。参加者は、家庭でできる美味しい野菜の作り方や、野菜を買うときの選び方など生活に活かせるお話のほか、練馬で採れる野菜や果物などの農産物についてクイズ形式で楽しみながら学びました。

① 講師 加藤正明さん

② 講師 加藤義貴さん

③ 講師 白石好孝さん

※農業体験農園：練馬区発祥の畑の学校で、利用者は農園主の指導のもと、種まきや苗の植え付けから収穫まで、一連の農作業を体験できる。

苔玉作り体験

花、多肉植物※を生産する花き農家である高橋徹さんが講師となり、苔玉作り体験を行いました。

参加者は、講師が用意した様々な種類の多肉植物から好みのものを選び、それぞれが奮闘しながら丸く整った苔玉に仕上げました。子どもが夢中になって作業する傍ら大人も熱心に取り組み、老若男女が楽しめるワークショップとなりました。

※多肉植物：サボテンや、アロエのような肉厚な葉に水分が蓄えられている植物。

京野菜ミニ収穫体験

講師は、トークライブにも登壇した渡邉幸浩さんを中心とした京都市の農業者の皆さんです。

この日のために、京都で育てた京野菜をプランターごと会場に運び込んでの収穫体験。参加した親子は、カブのような形をした「聖護院大根」や、一般的なニンジンよりも細く鮮やかな色をした「金時人参」など、普段目にすることが少ない伝統的な京野菜を収穫し、農業に触れる体験を楽しみました。

東京の農業を伝える出前授業

JA東京青壮年組織協議会の協力により、都内で農業を営む笹本善之さんら3名の講師を招き、東京の農業についての出前授業を開催しました。

東京で栽培されている農産物や畜産についてだけでなく、葉っぱや花の写真から野菜の種類を当てるクイズなど、楽しみながら東京の農業・都市農業を学ぶことができました。

話す・学ぶ（トークライブ）

※詳細は巻末資料32ページを参照

午前の部

都市農業のプロ×小島よしお
発見！もっと楽しい都市農業 ～明日、畑に行きたくなる話～

都市農業のファンづくりを目的に、3つのキーワードを切り口とし、都市農業の魅力について、楽しく語り合いました。

登壇者

練馬区

加藤 優子（かとう ゆうこ）
- 農園名「かとちゃんファーム」
- 江戸時代から400年続く農家
- 少量多品目で、年間約80品目を生産
- 「チームねりまde女子マルシェ」のメンバー
- 野菜ソムリエの資格取得

◆主な生産品目
キャベツ・ブロッコリー・きゅうり・いちご

練馬区

西貝 洸輝（にしがい こうき）
- 就農4年目の若手農業者
- 前職はJA東京中央職員
- 住宅街に囲まれた立地で、地域との共生を意識した都市農業を実践

◆主な生産品目
大根・かぶ・じゃがいも・なす・トマト

国分寺市

清水 雄一郎（しみず ゆういちろう）
- 農園名「清水農園」
- 有人直売所で穫れたて野菜を販売
- 落葉・馬糞で堆肥づくり 循環型農業を目指す
- こくべジプロジェクト検討会議メンバー

◆主な生産品目
サラダセット・エンドウマメ・たけのこ

松戸市

川上 修平（かわかみ しゅうへい）
- 農園名「和修園（わしゅうえん）」
- 前職はアパレル業
- こだわりは、子どもが笑顔になる野菜作り
- 配偶者はキッチンカーで地元農産物を使用した菓子販売事業を展開

◆主な生産品目
ねぎ・にんじん・じゃがいも・ブルーベリー

名古屋市

飯田 実（いいだ まこと）
- 農園名「飯田農園」
- 前職は食品メーカー勤務
- 名古屋唯一の有機JAS認証農園
- デパートでの販売のほか、トマト狩り等も実施

◆主な生産品目
miuトマト（高糖度ミニトマト）

京都市

渡邉 幸浩（わたなべ ゆきひろ）
- 京都市の伝統的な販売方法「振り売り」を実施
- 地元伝統野菜「山科なす」など自家採取栽培
- 大学で講義を行うなど、多岐に渡り活動
- 前・全国農協青年組織協議会理事（R4年度まで）

◆主な生産品目
ぶどう・たけのこ・葉物野菜・水稲

ゲスト

小島 よしお（こじま よしお）
- 沖縄県生まれ千葉県育ちのお笑いタレント
- 早稲田大学教育学部卒業
- 野菜ソムリエの資格取得
- JAグループが出版する食農教育月刊誌「ちゃぐりん」に連載を持つなど、食育や農業のPR活動にも力を入れる

司会

篠原 久仁子（しのはら くにこ）
- 野菜ジャーナリスト
- 全国の農産物や流通業界を幅広く取材し、メディアや講演を通して情報を発信
- 訪れた畑は500か所以上
- 野菜ソムリエプロの資格取得
- 野菜ソムリエ協会講師

トーク概要

キーワード❶「つなぐ」

加藤優子さん

「チームねりまde女子マルシェ」の活動を通じ、お客さんとの交流やつながりを楽しんでいることや、美味しかったという声が農業のやりがいにつながっていることなどについて語りました。

清水雄一郎さん

有人の庭先直売所が地域をつなぐコミュニティの場となっている点や、「こくべジプロジェクト」により、農を中心とした飲食店や地域などとのつながりが生まれている様子について語りました。

キーワード❷「極める」

川上修平さん

「子どもたちが笑顔になる野菜づくり」をコンセプトに、スーパーの地場産コーナーで販売。ブランド化の推進や配偶者が行う菓子販売事業との協業、地域貢献などについて語りました。

飯田実さん

第一子の病気をきっかけに、安心安全な食べ物を食べさせたいという思いで就農。高糖度トマトの栽培のこだわりや、経営理念の「しびれる農業」について語りました。

キーワード❸「受け継ぐ」

西貝洸輝さん

親戚が営農できなくなったことを機に、JAを退職して就農。先代が大事にしていた畑と直売所を受け継ぎ、「農地は地域の共有財産」との考えのもと行う、地域住民との交流や地域貢献などについて語りました。

渡邉幸浩さん

京都市の伝統的な販売方法「振り売り」をはじめ、京野菜の生産や大学での講義を通じ、農を中心としたコミュニティ形成、文化・伝統の継承に取り組む様子について語りました。

登壇農業者からのメッセージ ～都市農業を残すために～

- 実は農家は孤独。農作業をしている農家を見かけたら、ぜひ声を掛けてほしいです。そこから生まれるコミュニケーションが農業のやりがいや励みにつながります。
- 地元の農産物を買っていただくことが応援につながります。農家にとっての一番のやりがいは、皆さんが買って、美味しく食べて、笑顔になることです。
- SNSで情報発信していますので、ぜひ見てください。発信に対してリアクションがあることがやりがいにつながります。
- まだまだ都市農業について知らない方が多いのが現状です。我々農業者も発信を続け、消費者と共に都市農業を守っていきたいと思います。
- 収穫体験など実際に体験することは、農業を学ぶだけでなく食育にもつながります。農に触れる場が都市農業にはありますので、ぜひ畑に来てほしいと思います。
- ゲスト 小島さん：農家さんの話を通して、都市農業の多面的機能についての理解が深まりました。今後、直売所やスーパーの地場産コーナーで地域の農産物を積極的に買いたいと思います。

午後の部

都市農業のプロ×きじまりゅうた
都市農業“推しトーク” ～都市農業のこれからを語り合う～

都市農業への理解促進や農業者の営農意欲向上を目的に、3つのキーワードを切り口とし、各都市で行われている“推し”の取組を「まち」の視点を踏まえながら紹介するほか、都市農業のこれからについて語り合いました。

登壇者

練馬区

酒井 雅博（さかい まさひろ）
- 農園名「さかい農園」
- 庭先や直売所、区役所自動販売機などで販売
- 全国農協青年組織協議会 副会長
- 前・JA東京青壮年組織協議会会長（R4年度まで）

◆主な生産品目
トマト・ブルーベリー・えだまめ・練馬大根

練馬区

野坂 亮太（のさか りょうた）
- 農園名「野坂農園」
- 飲食店向けに、おしゃれなハーブや西洋野菜などを中心に生産・販売
- コミュニティ農園や保育園での指導も行う

◆主な生産品目
ルバーブ・アーティチョーク・ハーブ類

国分寺市

中村 克之（なかむら かつゆき）
- 農園名「国分寺中村農園」
- 減農薬などを意識し、最新技術を積極的に導入
- 地域に開かれた顔の見える農業を目指す
- 東京農村ビルを拠点に東京農業の魅力を発信

◆主な生産品目
いちご・トマト・東京うど

松戸市

成嶋 伸隆（なるしま のぶたか）
- 農園名「成嶋農園」
- 市の特産品「あじさいねぎ」の普及に取り組む
- インターネットラジオで農業情報を発信
- 野菜ソムリエプロ・土壌医などの資格取得

◆主な生産品目
あじさいねぎ・えだまめ・アスパラガス

名古屋市

小島 教正（こじま のりまさ）
- 緑信用農業協同組合 代表理事組合長
- 市内産“なごやさい”を朝市や軽トラ市で販売
- あいちの伝統野菜「徳重だいこん」の復活に尽力
- アボカドの特産化にも取り組む

◆主な生産品目
温州みかん・だいこん・さつまいも

京都市

中嶋 直己（なかじま なおき）
- 農園名「株式会社中嶋農園」
- 次世代の育成・継承のため法人経営
- 京都市内の飲食や弁当惣菜、百貨店等に出荷
- 農業こそ本当に生産性のある仕事と信じ、営農

◆主な生産品目
キャベツ・レタス・サニーレタス・黒枝豆

ゲスト

きじまりゅうた
- 料理研究家
- 豊島区出身で、祖母と母が料理研究家という家庭に育ち、幼い頃から料理に親しむ
- NHK「あさイチ」「きょうの料理」等の他、全国で講演会など多数出演
- JA東京あおばの広報誌「あおば」で、地場産農産物を使用したレシピ紹介を連載中

司会

小谷 あゆみ（こたに あゆみ）
- 農ジャーナリスト／ベジアナ
- 兵庫県生まれ、高知県育ち
- 石川テレビのアナウンサー時代に、市民農園、里山の番組を制作して以来、農をテーマに活動
- 世田谷で野菜を作るアナウンサー「ベジアナ」として農ある暮らしを発信
- 生産と消費をつなぐメディアになることを使命に取材活動

トーク概要

まちと共にある「農」

酒井雅博さん

推し「庭先直売所・マルシェ」
庭先直売所が地域に根付いた背景や、農業者と消費者の交流が醍醐味であるマルシェの魅力など、「農が生活に定着するまち練馬」について語りました。

中村克之さん

推し「こくべジプロジェクト」
市内産農畜産物を「こくべジ」の愛称でブランド化。飲食店でのメニュー提供、マルシェ、収穫体験などで、まちの活性化につながっている様子を語りました。

「農」でまちの代名詞をつくる

成嶋伸隆さん

推し「あじさいねぎ」
2011年の震災を機に、市場出荷から地元出荷に方向転換。地元での認知度向上に向けた飲食店や学校給食への提供、大学とのコラボなどの取組について語りました。

小島教正さん

推し「徳重だいこん」
一度生産が途絶えてしまった徳重だいこんの復活から「あいちの伝統野菜」に選定されるまでの取組のほか、アボカドの特産化への挑戦について語りました。

まちに「農」を残す

野坂亮太さん

推し「農で紡ぐ絆」
祖父から継承し、地域や飲食店とのつながりを育んだ畑を相続で失った厳しい経験にも負けず、農業の可能性を信じ、新たな畑で再スタートを果たした経緯を語りました。

中嶋直己さん

推し「次世代につなぐ農業」
祖父の言葉「畑は自分のものでなく先祖から預かったもの」を受け、次世代に農業をつなぐことを使命と考えての法人化や、環境配慮型農業などについて語りました。

都市農業のこれからを語り合う

- 収穫から食べることまでを身近に体験できるのが、都市農業の最大のメリット。五感に訴え、都市に農地があることの大切さを実感してもらえるようにこれからも頑張ります。
- 住宅と農業が密接な環境を活かし、様々な方達と連携しながら、これまでのカタチに囚われない新たな都市農業のスタイルを見つけていくことが大事だと感じました。
- 都市農業の多面的機能の発揮が求められていると思います。まずは農業者自らが理解し、期待に応えられるような農業に取り組むことが重要であると思います。
- 都市農業を残すためには、住民と農業者の相互理解が重要です。食育授業や地域への販売など、農業者も知ってもらう努力を続けていくことが必要だと思います。
- 住民が近いからこそ、情報発信による販売促進の効果が大きいです。消費者ニーズに応えた多品目生産のほか、後継者確保のためにも高単価品目の生産が重要です。
- 皆さんの話を聞いて、私がやっている方向性に自信を持つことができました。練馬の農業体験農園のように、地域住民が参加できる農業を実践したいと思います。
- ゲスト きじまさん：我々消費者にとって、新鮮な農産物を買えるほか、多面的機能の恩恵を受けられるなどメリットが大きいので、「農業者を応援する」「共に残していく」という意識を持ち行動することが重要だと感じました。

3｜前日プログラム（11月18日）

※被招聘者および関係者のみ参加

農地視察

視察に参加する被招聘者から多くの関心が寄せられていた「少量多品目生産・庭先直売所での販売」「農業体験農園」「野菜の収穫体験」「地域住民・小中学校等との連携」を実践する農園と、区内の農家レストラン※1を視察しました。

加藤農園／農業体験農園「緑と農の体験塾」（農園主：加藤義松さん／所在地：練馬区南大泉3-17）

「緑と農の体験塾」は、平成8年度に全国で初めて開園した農業体験農園です。農園主や利用者間の交流だけでなく、町会と協力した防災訓練を実施するなど、農地が地域コミュニティの場として機能している様子を紹介しました。

また、本農園は、令和元年度に指定された「南大泉三・四丁目農の風景育成地区※2」内に位置しており、地域住民と連携したイベントのほか、庭先直売所や果樹の摘み取り園の運営等についても紹介しました。

農業体験農園は、練馬区発祥の畑の学校で、利用者は農園主の指導のもと、種まきや苗の植え付けから収穫まで、一連の農作業を体験できる農園

上：コインロッカー式庭先直売所
下：柿の摘み取り園

農園主の加藤さんは、この地域の農業者は横のつながりが密接で、既存の形に囚われず新しいことに挑戦する傾向があることや、地域住民も農に対する理解があり協力的であることが農地保全や地域イベント開催の要因であることなどを語りました。

南大泉三・四丁目農の風景育成地区で行われたイベントの様子

※1 農家レストラン：農業経営体または農業協同組合等が食品衛生法に基づく許可を得て、自らまたは構成員（組合員）が生産した農産物等を用いた料理を提供して料金を得る事業。

※2 農の風景育成地区制度：農地や屋敷林等が比較的まとまって残る地区を東京都が指定し、農地等の保全を図るために、地域のまちづくりと連携しながら農のある風景を保全・育成していく制度。練馬区では、高松一・二・三丁目（一部）も農の風景育成地区に指定されている。

白石農園／農業体験農園「大泉 風のがっこう」（農園主：白石好孝さん／所在地：練馬区大泉町1-54）

白石農園は、練馬区大泉町で350年続く農家で、約100種類の野菜やブルーベリーを生産販売しています。野菜は近隣のスーパーで販売しているほか、練馬区内の飲食店や学校給食に納品しています。

また、約120区画ある農業体験農園やブルーベリーの摘み取り園、野菜の収穫体験、小中学校の体験学習の受け入れなども行っています。

自身の営農状況や農業体験農園のメリットなどについて説明

左：野菜の収穫体験をセルフ形式で実施
右：アスパラガスのハウス栽培。選別や包装作業を近隣の福祉作業所に発注し農福連携にも取り組む

農園主の白石さんは、昔は市場出荷メインだったが、地域に視点を向け、直売による地域住民への販売や、農に触れ合ってもらう機会の提供など、都市農業は時代や消費者のニーズに合わせて発展してきたことなどについて語りました。

農家レストラン「La毛利」（シェフ：毛利伸彰さん／所在地：練馬区大泉町1-54-11）

La毛利は、白石農園に隣接し、白石好孝さんがオーナーを務める農家レストランで、旬の新鮮野菜を使用した料理を提供しています。

白石さんからは開店の経緯や運営方法について、毛利シェフからは新鮮さや素材の味を生かした調理を心掛けていることなど、農家レストランならではの魅力について説明していただきました。

毛利シェフによるメニュー紹介

白石さんによる説明

白石農園の野菜を使用した料理

意見交換会

※詳細は巻末資料50ページを参照

【時間】16:30～18:40　【会場】ホテルカデンツァ東京　ラ・ローズ

全国の自治体・農業者・農業協同組合同士が、知見や経験等を共有し相互に学ぶことで、都市農業の発展に向けた新たな取組につなげることを目的に、テーマに沿った意思交換を行いました。

参加者数 89名（38名：4グループに分かれ議論に参加、51名：聴講）

テーマ「都市農業への理解促進・地域との共生」

グループA

<トピック1>　まちなか農業のメリット・デメリット

- 都市農業は、消費者が近く多様な販路があり、新鮮な農産物を提供できる一方で、農薬散布や農作業の騒音など、周辺の住環境への配慮が必要である。デメリットを無くすことは難しいため、例えば、収穫体験を通して市民に農業を見てもらう等、考え方を変えてもらうことで、ファンになってくれる方々の満足度を上げていくという考え方も大事である。

<トピック2>　無理なく効果的な情報発信

- SNSによる情報発信はファンづくりにつながると共に、拡散力があるため重要である。凝った投稿ではなく、何気ない農作業の風景などが意外と求められている。
- 消費者と直接会話することは相互理解につながりやすいため、どの農業者もコミュニケーションを大事にしている。

<トピック3>　農業者と消費者の連携による都市農業の未来像

- 買って食べてもらうという地産地消の推進や、収穫体験で農に触れるなどの楽しんでもらう機会を提供することで、農業への理解を深めてもらいたい。都市農業があってよかったと感じてほしい。

グループB

<トピック1>　ファンづくりに向けた情報発信

- SNSの発信を見て直売所に足を運んでくれる方や、スーパーでは手に入らない野菜を求めてくる方がいるなど効果を感じる農業者がいる一方、SNSを不得意とする農業者も少なくない。
- 農家自身ではなく、観光客や周辺住民が発信してくれるケースがある。
- 人の往来があるため、オンラインではなく農地での看板等のアナログな発信も効果がある。
- 個人だけでなく、飲食店等を巻き込んで発信することで訴求力も高まり効果的である。

<トピック2>　都市農業の多面的機能を活かした理解促進

- まず農業者が多面的機能について理解し、住民に伝えていく必要がある。
- 授業の受け入れ等、食育や教育的な機能を積極的に活用することが大事である。また、農業を地域の文化として残していく、伝えていくことも必要である。

<トピック3>　多様な連携による取組

- 連携相手として一番心強いのは地域住民であると思う。農業者は、農地の多面的機能を維持するためにも農業を継続し、その多面的機能を享受する地域住民と良好な協力体制が構築できると、好循環が生まれていくだろう。

テーマ「都市の特性を生かした営農・販売」

グループC

<トピック1>　都市農業の意義

- 消費者との距離が近いため、農業への理解が得やすい点や、顔が見える関係づくりができる。
- 農地があり身近な場所で新鮮な野菜にアクセスできること等が、住民にとって住みやすい環境の要素となっている。

<トピック2>　労働力について

- 参加農業者4名全員が労働力に課題を感じており、規模に対する労働力不足や、休暇が取れない、親世代との雇用に関する意見の違い等が挙げられた。
- 法人化した農園での時間単位の有給休暇制度の導入、区内農園での援農ボランティアの活用など、課題に対してそれぞれ取り組んでいる。
- 後継者を確保するためにも、休暇を積極的に取得する姿を見せることは重要である。

<トピック3>　収益の向上（生産面・販売面）

- 栽培方法のこだわりや手間が付加価値として訴求できていないなどの課題がある。
- 売上げ向上より生産コスト削減による利益確保に取り組むなど、戦略性が求められる。

グループD

<トピック1>　労働力について

- 農福連携の一環で福祉作業所から週1回作業に来てもらっている事例では、マンパワーが必要な単純作業では大きな力となっている。ただし、作業の向き不向きはある。
- ボランティアの活用や農福連携も含め、都市農業は選択肢が広いというのがメリットだが、雇う側の対応によってうまく機能するかが左右される。

<トピック2>　ブランド構築とブランド力強化

- ロゴデザインを作ったことで、消費者への訴求力を生み実際に売上げが上がった。他の農園との差別化という観点からも効果があると感じている。
- 行政の広報は摘み取り園等の集客に効果があり、何年も継続してきたことが結果としてつながっている実感がある。
- 新たな品目のブランド化に取り組み、高単価での販売を目指している。

<トピック3>　都市農業の意義・価値

- 都市に農地があること自体が大きな価値で、市民の「農に対する意識の玄関口」として都市農業があるべきだと思う。
- これからは「住民に開かれた農地」にしていくことが重要である。
- 消費者への新鮮な農産物の直接販売や、そこでのコミュニケーションを含め、「地産地消」の推進が大事である。

前夜祭 【時間】19:00～20:30 【会場】ホテルカデンツァ東京　アゼリア

被招聘都市を歓迎し、練馬区と被招聘都市が交流・当日への士気を高めるため、前夜祭を開催しました。参加者は、練馬産農産物をふんだんに使った料理を楽しみながら、それぞれの取組について語り合いました。

会場では、区内で活躍する「石神井太鼓保存会せんば太鼓」が演奏を披露しました。

練馬区・被招聘都市の集合写真

会場の様子

4. 開催までの取組
～フェスティバルの機運醸成企画～

4｜開催までの取組

～フェスティバルの機運醸成企画～

令和5年2月

イベント出展
ねりまシティ・ウィザード・フェスティバル
2/26

3月

イベント出展
西武 グリーンマルシェ
3/11

イベント出展
高松 みらいのはたけ 開園式
3/19

イベント出展
練馬こぶし ハーフマラソン 2023
3/26

4月

各館でコーナーを設けて都市農業を紹介

5月

イベント出展
第36回 照姫まつり
5/14

イベント出展
アニメ プロジェクト in大泉2023
5/28

6月

フェスティバルのSNSをフォローしブルーベリー摘み取り園で撮影した写真に「#全国都市農業フェスティバル」を付けて投稿した方に、スマホストラップをプレゼントするキャンペーンを実施。

7/1～8/6

7月

イベント出展
西武 グリーンマルシェ
7/8

イベント出展
ねりま 環境まなび フェスタ
7/29

8月

9月

「練馬の農業いま・むかし」刊行
（※詳細は66ページ）
9/1

区立図書館「都市農業」をテーマにした展示の開催

- ブルーベリー収穫体験キャンペーン
- モザイクアート写真募集
- 国際興業 区内で収穫体験を楽しめるバスツアー開催
- ランタン作りワークショップ

様々なイベントへの出展

フェスティバル開催をPRし、来場を呼び掛けるため、様々なイベントに出展しました。

パネル写真の展示やパンフレット等の配布のほか、「全国都市農業フェスティバル特製缶バッジ作り体験」も実施しました。

自分で機械を操作する缶バッジ作りは、子どもからおとなまでたくさんの方に参加いただき、大人気でした。

イベントPRブース

缶バッジ作り

モザイクアート写真募集

フェスティバルを皆さんと一緒に盛り上げることを目的に、巨大なモザイクアートを作成するため、「農とわたし」をテーマに、身近な農と皆さんが写っている写真を募集しました。

全部で2,000枚を超える写真が集まりました。

チラシより（一部抜粋）

応募された写真

ねりまランタンナイト ランタン作り ワークショップ開催

8月から9月の夏休み期間中、区立児童館等でワークショップを行いました。参加した子どもたちは、ランタンにそれぞれ思い思いの「農」に関係するイラストを描きました。

ワークショップ協力：
区立児童館・児童室
（18施設）

作成の様子

10月

ねりまランタンナイト 10/7

イベント出展 第46回 練馬まつり 10/15

イベント出展 東京味わいフェスタ2023 10/28・29

モザイクアート お披露目 10/15

「ねりまちてくてくサプリ」は健康づくりを応援する練馬区オリジナルアプリ。歩数を距離に換算し、コースの踏破を目指す「バーチャルてくてくコース」に、被招聘都市４都市の特別コースを期間限定公開。

◀ 画像イメージ

10/1～11/19

商店会の参加店舗で、1,000円以上のお買い物をした方を対象に、抽選で農協全国商品券などが当たる応援フェアを実施。

10/2～20

11月

イベント出展 ねりまの森の音楽祭 11/3

イベント出展 西武 グリーンマルシェ 11/4

イベント出展 ねりマルシェ 11/12

西武 旅するレストラン「52席の至福」区民限定貸切運行 11/4・12

バスツアー「おさんぽマルシェミニツアー」 11/19

11/19 全国都市農業フェスティバル

- 健康推進課「ねりまちてくてくサプリ」バーチャルコース公開
- 練馬区商店街連合会「全国都市農業フェスティバル応援フェア」開催
- 区立図書館「都市農業」をテーマにした展示の開催
- 西武鉄道 西武 旅するレストラン「52席の至福」において練馬産野菜を使用した料理 を提供（10～12月）
- 国際興業 区内で収穫体験を楽しめるバスツアー「おさんぽマルシェミニツアー」開催 （7～12月）

ねりまランタンナイト

日にち：令和5年10月7日(土)
場　所：区立練馬総合運動場公園

イベント当日は、前川練馬区長と志村練馬区体育協会代表理事、ワークショップに参加した親子や農業者など、約4,500人が参加しました。

カウントダウン後、約1,000基のランタンが、練馬の夜空を美しく彩りました。

モザイクアートお披露目

日にち：令和5年10月15日(日)
場　所：練馬まつり会場内(区立平成つつじ公園)

練馬まつり会場において、約2,000枚の写真を使用した高さ2.4m×幅3.6mのモザイクアートをお披露目しました。

お披露目後は、練馬区役所１階アトリウムに展示したのち、フェスティバル当日に会場でも展示しました。

西武 旅するレストラン「52席の至福」区民限定貸切運行

西武鉄道の協力により、11月4日(土)・12日(日)に区民限定で貸切列車を運行しました。

列車内では、キャベツやサツマイモなどの練馬区産野菜を使った料理が提供されました。また、参加者にはお土産として練馬区産サツマイモ使用のロールケーキもプレゼントされました。

バスツアー「おさんぽマルシェミニツアー」

国際興業の協力により、おさんぽ気分で参加できることが好評のミニバスツアーの特別版が、フェスティバル当日に開催されました。

区民限定のツアーで、参加者はブロッコリーや大根の収穫を楽しんだあと、フェスティバル会場も満喫しました。

5. 巻末資料

5 | 巻末資料

5-1. 被招聘者一覧

※敬称略

都市	氏名	農園・組織・役職
国分寺市	清水 雄一郎	清水農園（農業者）
	中村 克之	国分寺中村農園（農業者）
	平塚 和大	東京むさし農業協同組合 国分寺支店 指導経済課長
	山口 俊輔	東京むさし農業協同組合 国分寺支店 指導経済課 課長代理
	飯塚 達儀	国分寺市 市民生活部 経済課長
	榎本 紘幸	国分寺市 市民生活部 経済課 農業振興係長
松戸市	川上 修平	和修園（農業者）
	成嶋 伸隆	成嶋農園（農業者）
	佐々木 貴史	とうかつ中央農業協同組合 営農経済部 農業振興課 課長補佐
	鈴木 博文	とうかつ中央農業協同組合 営農経済部 営農生活課 課長補佐
	田嶋 和彦	松戸市 経済振興部 農政課長
	華原 叡美子	松戸市 経済振興部 農政課 主事
名古屋市	飯田 実	飯田農園（農業者）
	小島 教正	緑信用農業協同組合 代表理事組合長（農業者）
	菅野 忠広	緑信用農業協同組合 経済部長
	大塚 基広	緑信用農業協同組合 経済部 経済課
	河原 勝弘	名古屋市 緑政土木局 都市農業課 主幹（農業振興）
	太田 耕治	名古屋市 緑政土木局 都市農業課 生産振興係 主事
京都市	渡邉 幸浩	西野山 山渡（農業者）
	中嶋 直己	株式会社中嶋農園 代表（農業者）
	荒木 俊哉	京都市農業協同組合 常務理事
	新谷 雅敏	京都中央農業協同組合 経済部 営農販売課長
	齊藤 篤	京都中央農業協同組合 経済部 西南部経済センター 副センター長
	辻 高志	京都市 産業観光局 農林振興室 農林企画課 農業活性化担当課長
	杉本 知隆	京都市 産業観光局 農林振興室 農林企画課 振興係長

5-2. トークライブサマリー

(1)午前の部(10:30～12:00)

都市農業のプロ×小島よしお
発見！もっと楽しい都市農業 ～明日、畑に行きたくなる話～

スペシャルゲストにタレントの小島よしおさんを迎え、MCの野菜ジャーナリスト篠原久仁子さん進行のもと、これから都市農業について知りたいという方向けに開催。

「都市農業」ってどんな農業？といった基本情報のほか、練馬区と被招聘都市の農業者の皆さんが、3つのキーワードを切り口に、都市農業の魅力や消費者の方々に伝えたい想いなどを語っていただきました。

主催者あいさつ

ステージの様子

テーマ <都市農業の基本を知ろう>

MC 篠原さん

都市農業の特徴

●まずは都市農業の基本・特徴を確認しましょう。大まかに都市農業と平野での大規模農業とを比較しまとめると、資料1のとおりです。都市農業の特徴として「多面的機能」という言葉もキーワードになっています。農産物を生産する以外の様々な多面的機能が発揮されている事例については、後ほど農業者の皆さんからお話ししていただきます。

●続いて、都市農業における主な販売方法についてご紹介します。直売といっても、資料2のように様々なスタイルがあります。登壇者の皆さんのスタイルなどは、後ほど詳しく伺います。

特徴をつかんでいただけましたか？
それでは、「つなぐ」「極める」「受け継ぐ」の3つのキーワードのもと、農業者の皆さんとのトークを始めましょう！

資料1

資料2

キーワード <つなぐ>

練馬区 **加藤優子さん**

マルシェは「人と人をつなぐ」場

●「チームねりまde女子マルシェ」というマルシェ団体のメンバーとして活動しています。

●女性農業者は畑仕事や家事が忙しく、男性と比べて外出する機会が少ない状況がありました。マルシェをすることで外に出る機会を増やしていこうということで団体が立ち上げられ、私も共感して入ることにしました。

●団体のコンセプトは、「話して・知って・食べて・楽しんで・繋がる」。農業者だけでは農産物のみになってしまうので、飲食や手芸を取り扱うお店も参加しています。お客さんといっぱいおしゃべりをして、楽しく会話をしながら販売したい！という想いでやっています。お客さんに楽しんでいただけて、自分たちにとっても良い情報交換の場となっています。

練馬区 加藤さん：野菜ソムリエの資格を持っているので、美味しい食べ方やレシピを提案しながら販売しています。

小島さん：普段捨てる葉の部分の美味しい食べ方が聞けるなど、SDGsにもつながるし、「農家さんがどういう想いで野菜を作ったか」を知るとより美味しく感じたり、その人の野菜を選んで買うことにつながると思います。

練馬区 加藤さん：こうした活動が評価を受けて、昨年度、東京都から「女性活躍推進大賞 特別賞」をいただきました。日頃の活動が認められ、やりがいにつながっています。

ボランティアさんとのつながり

●農業を応援してくれる「援農※ボランティア」の方に日頃の農作業をサポートしていただいています。長い方だと、5年間、週2回来てくださっている方もいて、とても助かっています。「今日は楽しかった」「いい汗かいた」「また来るわね」という言葉がすごく嬉しくて、ここでも人とのつながりを感じています。

小島さん：僕も仕事で収穫体験などさせてもらいますが、土に触れると元気が出て、健康にもいい気がしています！

※ 援農：農家ではない人が、有償または無償で農作業を行うこと。

国分寺市 **清水雄一郎さん**

コミュニティの中心となる庭先直売所

- 私は、生産した農産物のほとんどを自分の庭先直売所で販売しています。
- 直売所は有人形式で、大根が無くなると、畑に行って大根を抜いてきて、そのまま「どうぞ」と抜きたてをお渡しできるようなスタイルです。
- 大根だけでも7～8種類あり食べ方も様々なため、レシピも紹介しながら販売します。スーパーなどで買うのとは異なり、販売している私の母や妻、そしてお客さん同士が会話をしており、まさにコミュニティの中心になるような場所だと思っています。

小島さん

こうした直売所はすごく贅沢なサービスだと思います。今は、ネットで便利にレシピを調べることができますが、人から直接聞くのは温かみがあっていいですね。

市内農家が生産した農畜産物のブランド「こくベジ」の輪

- 農家だけでなく、商工会や市民の方、デザイナーさんなど、地域の方が集まり「こくベジプロジェクト」として、まちを循環する、盛り上げる取組をしています。
- こくベジを使用したメニューを提供する飲食店は、始まった当初は市内に22店舗でしたが、今は約90店舗に増えています。また、プロジェクトではマルシェも開催。陳列を見映えが良いように工夫し、デザイン性にもこだわっています。
- 「こくベジ」は、飲食店で食べられたり、街中にのぼり旗が立っていたりするので、市民の皆さんにも浸透している印象です。
- 小学生から大学生まで直接触れ合う機会が多く、皆さんが「こくベジの農家さん」と呼んでくれるようになりました。生産者として本当にやりがいのある取組だと思って活動しています。ぜひ、国分寺市に来てください。

フリートーク

小島さん

とにかく加藤さんも清水さんも楽しんでいるなという印象を受けました。それってすごく大事なこと。例えば子どもたちが「このおじちゃん、このおばちゃんたち楽しそうだ」と感じることが「私も大人になったらやってみようかな」って考えることにつながる。
キーワードのとおり、世代間をつないでいくということにもなると思いました。

京都市 渡邉さん

マルシェや有人販売をされているお二人は、一般的な農業者より人と触れ合う機会が多いと思います。その中で最もやっていて良かったと思える瞬間はどんな時ですか？

練馬区 加藤さん

料理のレシピなどを伝えたお客さんが、また来店して「あの料理美味しかった」と言ってくれると教えがいがあったな、おしゃべり楽しかったなと感じて、やりがいになっています。

国分寺市 清水さん

飲食店で食べてくれたお客さんが「美味しかったよ」と、うちの直売所に買い求めに来てくれたりすることが嬉しい。野菜でまちが循環していると感じることが増えました。
また、「国分寺市って緑豊かなんだな」「農があっていいね」という声を聞くことがやりがいですね。皆さんに応援していただいております。

キーワード ＜極める＞

松戸市 **川上修平さん**

「子どもたちが笑顔になる野菜づくり」をポリシーに農園をブランド化

- アパレル業界での勤務の後、今から9年前の25歳のときに農家へ転身。その後、4年前に親から経営を引き継ぎました。
- 手広くやるのではなく、うまくいっている部分に自分の力を圧縮して、そこを極めていくスタイルをとっています。農園は「和修園」という屋号でブランド化しました。
- 指定野菜※14品目を重点的に生産し、食卓で馴染みのある野菜を「しっかり綺麗に作っていこう」というコンセプトのもと栽培、ポリシーは「子どもたちが笑顔になる野菜づくり」です。
- 親御さんから、お子さんがうちの野菜を食べてから苦手だった野菜が食べられるようになった、と聞くと頑張りが報われたようで嬉しくなります。

キッチンカーで地元農産物メニューを販売

- 元パティシエの妻が、キッチンカー「ATELIER nihaku」で料理やスイーツを提供する菓子販売事業を運営しています。
- 20～30代を中心とした松戸市の若手農業者グループ「4Hクラブ」に所属しており、地元の若手農業者と連携して、自分や仲間の作った野菜や果物を提供しています。商品だけでなく、商品提供の仕方やSNSでの発信にも工夫しています。

地域のためにできること

- 地元の幼稚園児向けにさつまいもの収穫体験もしています。収穫した芋を「とれたよ！」と見せてくれたり、生き生きしている子どもたちの姿は元気をくれる。食育の意味合いもありますし、地域の方へ土と触れ合える機会を提供する収穫体験はもっとやりたいですね。行政と連携してもっと声をかけてもらえるといいなと思います。

※ 指定野菜：全国的に流通し、特に消費量が多く重要なものとして国が指定している野菜のこと。キャベツ、きゅうり、さといも、だいこん、たまねぎ、トマト、なす、にんじん、ねぎ、はくさい、ばれいしょ、ピーマン、ほうれんそう、レタスの14品目がある。

名古屋市 **飯田実さん**

食べ始めたら止められない、有機栽培高糖度ミニトマト

●名古屋駅から車で20分の農園で、サクランボみたいに甘いミニトマトを栽培しています。

●食品メーカーで働いていたのですが、長男が先天性の病気で生まれたことをきっかけに、「子どもに安心安全なものを食べさせたい」という思いから13年前にトマト農家になりました。

極める！トマト作りのこだわり

●ハウスで袋培地栽培という手法で育てています。袋培地栽培は水の管理がしやすく、根域制限によってストレスをかけ、甘みや旨みを引き出しています。

●有機JASの認証を受けており、鰹と昆布が入った肥料を使用し、糖度8.5%以上を保証しています。甘いだけでなく旨み成分がしっかりしていて、海の恵みの肥料を使って育てたトマトなので海を逆さまに読んで「miuトマト」と名付けました。

●規格外トマトを使用した加工品製造にも力を入れていて、トマトジュースの上澄みだけ取り出した透明なジュースやトマトのお塩など、多彩な加工品を製造・販売しています。

●経営理念はしびれる農業。「しびれるくらい儲かって、しびれるくらい家族にとって価値があり、しびれるくらいカッコいい」農業です！

●この理念のもと、地元のデパート、全国各地の百貨店や展示会のほか、香港や中国、台湾など海外でも販売。味、ラインナップの幅があることも好評です。直接自分が行って、現地のお客さんと話すことで買ってくださる方が広がるのを感じます。

家族と共に

●初めは反対されたのですが、現在は家族全員が協力してくれています。今年東京で参加した展示会では、就農のきっかけをくれた長男が一緒にトマト販売に従事し、外国のお客さんに英語で接客してくれました。

フリートーク

小島さん　僕が子どもの時もそうでしたけど、「いっぱいお金を稼ぎたい」というのは夢のモチベーションだったりすると思うので、農業で稼ぐということをこういう場で包み隠さず、格好いいこととして表現されるのは、素晴らしいと思いました。

松戸市 川上さん　儲けたいより稼ぎたいです。「儲ける」だとタイミングがよくてお金になる場合もある。そうではなく、努力して自分でちゃんと働く結果が「稼げる」だと思います。農業も稼げるっていうのを見せるのはイメージ的にも良いことだと思う。

キーワード ＜受け継ぐ＞

練馬区 **西貝洸輝さん**

人生設計どおりには行かない……？ 急遽訪れた転機

●練馬区の中村南という地域で農業をしています。もともと父が農業を営んでおり、将来的には自分も就農するものと考え、JA東京中央に就職し働いていました。

●50歳くらいに退職して父を手伝うのかな、と思っていたのですが、父の隣の畑で一人で農業をしていた親戚の大叔母が高齢で農業ができなくなりました。「誰かやってくれないか？」と声をかけられ、急遽、退職して受け継ぐことになりました。

●計画と違うことは起きますし、人生いろいろです。この転機が私の人生における重要な選択であり、新たな挑戦になりました。

大叔母から受け継いだ畑と直売所

●庭先直売所は、継いだ時には閉まっていました。私が農業を再開したのを知ったご近所の方から、「直売所やらないの？」という声があり、再開することにしました。老朽化していたので、リニューアルしました。改装した直売所では、150円や200円といった手頃でお釣りの出にくい価格で無人販売を行っています。

●せっかく農業を継いだので、この地で何十年と続けていきたいと思っています。私は人付き合いが苦手な方ですが、地域の方々との交流を大切にしたい。そこで、お客さんの声を聞くため、直売所に交換日記のようなノートを置いています。作ってほしい野菜などについてコメントしてくれるので、ノートからのアイデアで新しい野菜を生産することもあります。

地域に開かれた畑にしたい

●ノートに「収穫してみたい」「イベントやりませんか？」という声があったことをきっかけに、農業体験や収穫体験も行っています。せっかく都市に広い農地があるので、農産物の生産だけではもったいないと思います。
無理のない範囲で地域の人を巻き込んで、楽しいことをやっていきたいですね。

練馬区 西貝さん　春、秋になると下校時に子どもたちがチョウチョを捕まえに来たりします。

小島さん　畑が普段から行ける場所になったら、いざという時に災害時の避難場所として思い浮かべられる人が増えるかも。

練馬区 西貝さん　小島さんもおっしゃるように、いざという時の避難場所にもなります。そう考えると、農地は自分だけのものではなくて、みんなの「共有の財産」だなと。大切にしていきたいと思っています。

京都市 **渡邉幸浩さん**

伝統を受け継ぐ「振り売り」

- うちの農園ではお米、季節の野菜、タケノコ、そしてブドウを栽培しており、都市農業ならではの光景が広がっています。
- 私たちは、地元の伝統的な経営形態として息づく、「振り売り」と呼ばれる各家庭に訪問する移動販売を行っています。
- かつて、明治以前には京都に都（みやこ）があり、日本の中心地で多くの人が住んでいました。この「元祖・都市」である御所周辺に京都の農家が売りに行っていまして、その頃から続く、京都の文化の一つになっています。
- 京都市内の北の方では女性が振り売りに行っていたそうです。我々の地域・山科は京都市の東の方にあり、昔から男性が行うという特徴があります。同じ振り売りでも地域で特色があるんです。
- うちは毎週水・土曜日に売りに行っています。振り売りではお客さんとおしゃべりしたり、交流が盛んで、お客さんとの距離が近いのが魅力です。

京都と練馬の交流

- 実は、練馬大根も振り売りで販売しました。JAには青壮年部という農業の担い手の組織があって、JA京都市と練馬区にあるJA東京あおばの青壮年部でパートナーシップを結んで交流していこう、という取組があるんです。コロナ禍で直接交流できなかったのですが、京野菜を練馬で、練馬の野菜を京都で販売しました。
- 販売場所はとても多様で、祇園のど真ん中だったり、清水寺の手前であったりします。
- 民泊もあり、外国からの観光客の方は意外と自炊される方が多いので、野菜を買いに来る方もいらっしゃいます。

京の伝統野菜を受け継いで、つなぐ

- 京の伝統野菜が40種類ほどあり、「山科」がつくのは山科なすと山科唐辛子の2種類です。これらは自家採種し残しています。伝統野菜を地元でしっかり栽培し、しっかり守り、残していくことが私たちの使命です。
- 振り売りの活動だけでなく、大学での講義や、令和元年に練馬区で開催した「世界都市農業サミット」で講演をするなど、農業の魅力や振り売りの特徴を広く発信しています。
- 大学で発信することは、職業を考える世代に農業を知ってもらう場として大切だと思います。農業人口は減っているけれど、農業は一つの文化でもあるし残していくべきもの。学生の皆さんが将来のことを考えるとき「農業すごい、カッコいい」と思ってもらいたいですね。

フリートーク

小島さん

西貝さんは、子どもたちが集まれる場所を大事にされている。シャイなお人柄だけど、想いを感じました。
京都は地域的にグローバルに色んな方が訪れるようなところなので、パフォーマンス的にも魅力を伝えられる渡邉さんの振り売りは素晴らしいなと思いました。

京都市 渡邉さん

僕がSNSで発信しなくても、お客さんみんながインフルエンサーとして振り売りを上手に発信してくれるので、助かっています。

＜都市農業の課題を知ろう＞

MC 篠原さん

- 皆さんの取組を通じて都市農業の魅力を伺ってきましたが、一方で課題もあります。
- 資料3のとおり、都市農地は減少し続けています。練馬だけでなく、どの都市でも同様です。観客の皆さんも畑だったところが住宅になったという経験があると思います。
- このような課題もありますが、都市農業は都市生活に豊かさをもたらすものであるという認識も広がってきています。
- それが、資料4のとおり都市農業が持つ「多面的機能」です。農産物を生産するだけではなく、都市における貴重な緑地として環境保全やコミュニティ形成、防災などの機能も持っています。

資料3

資料4

小島さん

皆さんのお話の中に多面的機能とは何なのか、多面的機能のそれぞれの要素が全てありましたね。教育の場や、いざという時に集まれる場所であるなど、皆さんが実践されていることとして紹介していただきました。言葉としてだけで聞いても理解しづらかった「多面的機能」が、皆さんの活動を通してよく理解できました。

＜ エンディング＞　ー農業者の皆さんから伝えたいことー

練馬区 西貝さん

私一人でやっているからこそ感じている部分も大きいですが、農業というのは孤独の闘いでもあると思います。農業をしている人を見かけたら、一言声をかけてもらえたら嬉しいです。
中には気難しい方もいるかもしれませんが、たいていの農家は返答してくれると思います。そこから生まれるコミュニケーションが農業をやる励みにも繋がり、消費者・農家のそれぞれの想いが共有できると思います。ぜひ皆さんよろしくお願いいたします。

小島さん　何と声を掛けられると嬉しいですか？

練馬区 西貝さん　「草むしり手伝いましょうか」が嬉しい！
冗談です。「何作ってるの」など何でもいいです！

国分寺市 清水さん　皆さんにたくさん買ってもらうことや、私たちが作っている野菜を使っている飲食店で食べて、美味しいと笑顔になってもらうことが一番かなと思っています。
今は、多くの農家がSNSで発信しています。お気に入りの農家がいたら、是非フォローしていただきたいです。私もSNSやっていますので、ぜひ探してみてください。

小島さん　「推し」ですね。農業も推しの農家の方を作る！

京都市 渡邊さん　農業をしている方でも「都市農地・農業の多面的機能」について知らない人も多いようにも思います。今日の登壇者の皆さんは、都市農業の先駆者でもあります。先頭に立って発信していくのが僕らの役割で、積極的な発信をし続けていくことが一番大切。
今後とも皆さんの応援をいただきながら、都市の農地をしっかりと守っていきたいと思います。

ゲストのアイデア

小島さん　お笑いと農業って遠いようで、意外と近い。お笑いが好きなのと同じように野菜もみんな好きだし、生活に必ず必要なもの。
お笑い業界は「M-1グランプリ」※のような大会が増えたことによって、芸人になりたい人の数が増えたと言ってもいいと思います。農業でも、例えば農地を使ったイベントで芸人さんに野菜関係のネタを作ってもらい「野菜-1グランプリ」をする。農業や野菜をもっと身近に感じてもらうことにもつながると思います。いきなり「農家になる」はちょっとハードルが高いけど、そういう試みはあっても良いと思います。
畑でアイドルのライブやボディビルコンテストをやってみるなど、通常結び付かないようなものと結び付けてみると、新しい可能性や新規ファンが増えていくかもしれないですね。

畑に行きたくなったら

練馬区 加藤さん　うちの畑では、小学生が毎年練馬大根の引っこ抜き（収穫体験）をやっています。長くて抜きにくいのですが一生懸命頑張って抜いた時に「抜けたよ」とか「この大根をおでんにしようかな」「豚汁にしてもらおうかな」なんて言っている子ども達の姿を見ていると、食育にも繋がっているんだ！って凄くいいなと思いますね。

MC 篠原さん　フェスティバルのパンフレットには、練馬区の直売所、収穫体験などの紹介があります。本日の農業者の皆さんの話を聞いて、「畑に行ってみたい！」と思った方は是非チェックしてください。
本公演が観客の皆さんにとって、都市に農地があることの魅力を知り、農地が今後も都市にあり続けるためにご自身にできることなどを考えるきっかけになりましたら幸いです。

※ M-1グランプリ（エムワングランプリ）：平成13（2001）年に始まった、若手漫才師を対象とした漫才のコンテスト。通称「M-1」。

(2)午後の部（14:00～15:30）

都市農業のプロ×きじまりゅうた
都市農業“推しトーク” ～都市農業のこれからを語り合う～

スペシャルゲストに料理研究家のきじまりゅうたさんを迎え、MCの農ジャーナリスト小谷あゆみさんの進行のもと「都市農業“推しトーク”」と題し開催。

農業者の皆さんにそれぞれの都市における農を、「まちと共にある農」、「農でまちの代名詞をつくる」、「まちに農を残す」の3つの切り口で語っていただきました。

MC 小谷さん　「都市農業」の定義は、市街地やその周辺の地域で行われる農業です。その特徴は消費者と畑が近いということ。住宅街のすぐそば、手に届くところに畑があり、農産物が生産されています。

きじまさん　都市・都会でどのように農業が行われているか、農業者の皆さんに色々お聞きしてみましょう！

【MC】小谷あゆみさん（農ジャーナリスト）
【ゲスト】きじまりゅうたさん（料理研究家）

ステージの様子

キーワード ＜まちと共にある「農」＞

国分寺市 **中村克之さん** 推し こくべジプロジェクト

農家や飲食店をはじめ、市役所、JAなど様々な人と取り組む「こくべジプロジェクト」

- 「こくべジプロジェクト」は、国分寺市が地方創生先行型事業として始めたもので、市内の農家が販売目的で作った農畜産物を「こくべジ」という愛称でブランド化し、市内の飲食店に提供しています。
- 様々な関係者が協力しており、商工会、観光協会、NPOや市民も積極的に参加。新しい農のあるまちをつくる取組となっています。

プロジェクトの肝・新しい流通モデル「こくベジ便」

●飲食店に農産物を使ってもらいたいけれど、自分で飲食店に野菜を届けるのは大変なこと。例えば、飲食店の需要が「大根を2本」「トマト2つ」だった場合、配達しているとその時間、農作業ができなくなってしまう。そこで、NPOの方がこくベジ便を立ち上げ、飲食店から注文を取り、農家に注文を回すという形で<輪っか>ができました。
配送だけでなく、例えば「この前出されたトマトあんまり良くなかったね」とか、そういった飲食店からの声も僕らに伝えてくれます。これがあるからこそ、こくベジがずっとここまでつながってきていると感じます。

京都市 中嶋さん

私は、自社便で取引先の店舗に配達をしているのですが、手間が大きく、小口の注文に対応するのには苦労があります。NPOが主体になるこくベジ便は良いビジネスモデルだと思います。

大手の食品企業やカフェなどとの連携

●例えば、不二家（洋菓子を中心とした食品会社）さんがこくベジのイチゴを使用したショートケーキを販売しており、地元の名産品を積極的に活用してくれています。また、GAP（衣料品ブランド）さんの支援による衣料提供など、様々な形で認知度が上がっています。

●農家にとっては、「自分の作った野菜があんな格好いいカフェで使われている」というのがすごくモチベーションになり、普段の大変な農作業がちょっと面白くなってくるような波及効果も。

新たな需要を作るためのイベントや販売の工夫

●トマトフェスタや特産品である東京うどを使用した「うどフェスタ」など、季節ごとのイベントも開催。イベントを通じて、地元食材や農産物に対する理解を深め、新たな顧客層を開拓しています。

●うどフェスタでは、まるで予想もしなかったような料理が提供されて、大ベテランの生産者も驚き！こんな食べ方がある、と知っていただくことで手に取る層も広がりました。

きじまさん

たしかにうどは、食べ方を知らない方が多いです。実は使ってみるとすごく使い勝手が良い！

●プロジェクトメンバーであるデザイナーによってデザインされた野菜棚や、クリスマスマルシェでの展示方法なども導入し、販売方法にも工夫を凝らしています。

●こくベジを通じて農産物に親しんでもらうため、農家で菜花の摘み取りを行い飲食店の人がその場で料理して提供するといった、体験型のイベントも積極的に展開しています。

練馬区 **洒井雅博さん** 推し 庭先直売所・マルシェ

「農が根付いたまち練馬区」になったのは…

●私たちの農産物が地域に根付いていること、これにはコインロッカー式の庭先直売所が大変意義深い存在です。

●練馬区は昔から有人・無人の販売所がいっぱいあったんですが、無人にすると野菜泥棒被害もしばしば発生していました。そういう時にコインロッカー式の自販機が登場し、それを練馬区が農家に大体半額ぐらいの助成を出して買えるようにしてくれました。その結果、今コインロッカー式の自販機が広がっています。

●農家自身の努力だけでなく、区（行政）が我々農家の声を聞いて、助けてくれるからこういう文化がずっと残っているのだと思っています。

生活に定着しつつあるマルシェ

●農産物の旬の時期が来ると、毎週のように練馬区のどこかでマルシェが開催されます。

●マルシェは地域の農家が集まってグループを組んで、自発的に行っています。それに共感してくれる図書館や駅前などを会場に開催しています。

●たくさんのお客さんがマルシェに来て我々農家と直接話したり、いろんなコミュニケーションを取ることが農家のことを知ってもらう機会になっています。また、消費者がどういうものを求めているかを聞くことによって我々の生産意欲向上にも繋がっています。

●マルシェは単なる販売の場ではなく、それぞれが花や加工品で売り場をデコレートするなど、私たち農家の誇りを表現する場でもあります。

●練馬区役所内には野菜の自動販売機が設置され、まさに地元の職員や住民が日常的に新鮮な農産物を手に入れる場となっています。

京都市 中嶋さん

マルシェがたくさん開催されていると、出店している期間、畑の手入れや収穫作業ができなくなるなど、負担を感じることはない？

練馬区 洒井さん

各地で開催されてはいますが、自分自身が出るのは1～2週間に1回ぐらいで、そこまで負担にはならないです。いろんなお客さんが来てくれるので、1日の売上げも大きいです。

これからも「農のあるまち練馬」であるために

●小中学校の授業で子どもたちが畑に来て、農業体験をしてもらうことや、家族でブルーベリー摘み取りのような収穫体験に参加してもらうことは、未来の農業の応援団を育てるために非常に重要です。

●泥だらけになりながら、土と触れ合ったり農作物の成長を体感することにより、子どもたちに農業の奥深さを理解してもらえることは、地域の持続可能な未来への投資となっています。

キーワード ＜ 農でまちの代名詞をつくる＞

松戸市 **成嶋伸隆さん** 推し あじさいねぎ

松戸の名産「あじさいねぎ」をまちのブランドに！

●あじさいねぎは、味も良くて彩りも良いネギで「味」「彩」ねぎ、という由来の青ネギです。

●あじさいねぎを通じて地元の農業を振興し、まちの象徴にしようと様々な取組を行っています。2011年の震災後、東京で出荷されていたあじさいねぎの価格が急落。それなら地元でと考えましたが、これまで東京への出荷がメインだったため地元での需要も低迷していることに気づきました。そこで、あじさいねぎの地元での知名度向上を図るべく動き出しました。

●当時の流行もあり、ゆるキャラも作りました。結構好評です！歌も作ったのでYouTubeで＜あじさいねぎ王子＞で検索してください。

飲食店とのコラボ

●まずは地元の飲食店に足を運びました。最初は難航しましたが、行きつけのお店に通い提案を行いました。その結果、現在は10軒の飲食店があじさいねぎを常設メニューとして採用し、季節限定メニューとして取り入れてくれる店舗が4軒あります。

●市場出荷ではなく直接契約しているため、価格が安定し、農業経営の計画がしやすくなりました。

大学とのコラボ

●栄養士を目指す学科のある地元の大学と、商品や料理の開発を行いました。学生の皆さんがレシピや加工品開発に携わることで、生産者が思いつかないアイディアに触れることができました。このコラボは地元メディアの注目を浴び、知名度が向上しました。
また、栄養士を目指す学生たちは、将来食に関する仕事に就く可能性が高いので、あじさいねぎを使おうと思ってくれるかも、という先行投資的な視点もあります。

●将来的には、商学部や経営学部の大学とも協力して、地域の経済や食文化の発展に寄与することを検討しています。

学校給食での提供

●地元の学生や保護者に、あじさいねぎの存在を広く知ってもらうことを狙っています。私が確認できたなかでは現在、市内の40校の公立小中学校であじさいねぎが給食に使用されており、地元での消費を促進しています。また、食育授業も行っています。

●あじさいねぎの知名度は確実に上がっています。先日行った中学校での食育授業では学生さん一人が農家になりたいと話してくれました。これは嬉しかったですね。

名古屋市 **小島教正さん** 推し 徳重（とくしげ）だいこん

一度途絶えた伝統野菜「徳重だいこん」を6年かけて復活！

●徳重だいこんは、太くてずんぐりとした形状で、肉質がしっかりしており、おでんや煮物などの料理に適しています。輪切りにしても同じ大きさになるのが一番の特徴だと思います。

●名古屋市緑区の鳴海という地域で明治の中頃から栽培され、都市化などにより昭和50年代には完全に途絶えてしまいました。どこかに種がないだろうかと地元を探し続けたところ、隣の地域の農家の冷蔵庫の奥から、徳重だいこんのものと思われる種が見つかりました。

●農家の協力や行政の支援を受けて、JAにおいて一番“らしいもの”を選んでもう一度畑に戻して種取りをする「母本選抜（ぼほんせんばつ）」などの地道な努力と試行錯誤を重ね、蘇らせることができました。

●令和４年には「徳重だいこん保存会」を設立して、種の一般配布や情報発信などを行い、普及に向けた取組を進め、令和５年３月に「あいちの伝統野菜」に選定されました。

●徳重だいこんを食べた市民の方から「私も応援していきます」と応援をいただいたりして、とても励まされました。徳重だいこんの特長や美味しさを再び伝えられるようになり感慨深いです。

復活させた伝統野菜を地域の誇りに

●地域資源を活かし、地元の人々が笑顔になれる場をつくり出すことが目標です。

●現在、地元飲食店６店舗が徳重だいこん協賛店に。大根を2本持つと11という数字に見えるので、12月11日を「徳重だいこんの日」とし、徳重だいこんを使用したメニューを一週間提供するなどの取組も行っています。

●地元の伝統工芸である鳴海絞りとのコラボでは、染料として徳重だいこんの葉っぱを使って染め物を作りました。

●農業、大根を通じて、地元の歴史文化の掘り起こしや地域の活性化ができたとともに、生産者・JA・行政が一体となって取り組むことができました。

地域の特産品として

●地元農業を未来に繋ぎ、地域の発展に寄与できるよう、13人の若手農家と協力して、名古屋市産アボカドの生産という新しい挑戦「森のバタープロジェクト」にも取り組んでいます。外国産よりもまろやかで非常に食べやすいアボカドで、付加価値を付けた販売ができると期待しています。

●徳重だいこんはまだ希少な存在。もっと多くの人に楽しんでもらえるよう、栽培を増やしていくことが今後の目標です。また、このプロジェクトを起爆剤にして、更に名古屋の農業を次の世代の農業に繋いでいこう、地域全体で盛り上げていこうと思います。

●名古屋における農の取組である徳重だいこん、アボカドをまちの代名詞ということで、どんどん宣伝しまくっていこうと思っています。

きじまさん　地域の名前が入った野菜があるっていうのは、地元の人には特別に感じられますよね。

キーワード ＜まちに農を残す＞

京都市 **中嶋直己さん** 推し 次世代につなぐ農業

次の世代への農地の継承という使命

●祖父がある時、「畑をわしのもんやと思ったことはない。先祖から預かって次の者に渡すだけや」と話すのを聞き、私も「自分は畑からしたら通過点なんだから、自分も畑を預かって次の人に渡すんやな」と思い、次の世代に農業をつなぐことを使命として農業を行っています。

●自分は4代目ですが、これから先、私の息子が農業を継ぐかというと、わからない。それなら農家じゃない人でも、やりたい人がいるならやれるようにする方がいいということで、株式会社を設立しました。今3人が正社員として働いています。

●会社にした以上、働き手のために細かい部分も整える必要があり、有給休暇の時間単位での取得や、キッズルームの設置を進めた結果、京都府知事が取材に来てくれるなど、注目していただけるようになりました。

中嶋直己さん祖父

自然環境へのアプローチ

●我々は畑から農産物を収穫させてもらっているので、自然環境が大事だと考えています。異常気象による影響への対処として、少しでも環境への負荷が低い農業、例えば化学肥料や農薬を使わない農法の割合を増やしていこうという取組をしています。
また、取引している飲食店から生ごみを受け取り、堆肥にして畑に還元するなど、環境に対する積極的なアプローチを進めています。

きじまさん 飲食店の生ごみを堆肥化する取組、すごいですね。農産物を渡して、残ったものをもらって、堆肥化して別の農産物を生産するという循環なんですね。

MC 小谷さん フードロスへの意識が高まり、東京などでも残渣※を生かして土作りにという動きが出ていますが、食べる人と堆肥を使う人・農地が近い都市農業ならではの循環だと思いました。

まちに農を残すために、人を育て、自然を守る

●生ごみを使用した堆肥を撒いた畑で、サツマイモの収穫体験もしています。来てくれた人に、「うちはこういう風にして農業をしているんです」と伝えて、少しでも理解を深めてもらおう、環境への意識を持ってもらおうという取組でもあります。

●収穫体験をやって良かったなと思うのが、子どもたちが来てくれるようになったことです。イベントの終わりに、「皆さん大きくなったらうちに就職してくださいね！」と、小さいうちから声をかけています。

●こうした取組のほかにも、移動販売や地域のマルシェに出たり、大学に行って授業もしています。先日は、保育所の一角で白菜作りを教えるなど、地域に出て行くような活動もしています。

※残渣：野菜の収穫後に残る実以外の茎や葉、つる、根などの残骸物。

練馬区 **野坂亮太さん** 推し 農が紡ぐ絆

就農の経緯

●会社員をしていたのですが、退職し転職活動をしているときに、農業をしていた祖父の手伝いをすることになったのがきっかけで、就農しました。丸一年間、祖父に野菜の育て方を教えてもらい、2年目になろうとした頃に祖父が不慮の事故で亡くなったため、一人で営農することになりました。

●今日、農業祭の品評会に出品したケールは、良好賞をいただきました。ほかに生産しているのも、ちょっと変わった西洋野菜。例えばナスタチウムという花は葉っぱと実が食べられて、ぴりっとワサビ風味になっています。それから大根の花、これは食べると本当に大根の味がする。こうしたハーブやお花などを飲食店さんに使っていただいています。

地域とのつながり

●畑の隣に保育園があります。年長クラスの子達が丸1年、肥料をまいたり種をまくところから一緒に作業し、つい先日サツマイモの収穫をしました。ご近所なので、私がいない時でもお水をやりに来たりします。

●西東京市にあるコミュニティ農園では、営農指導を行っています。地域の方、デイサービスの方や福祉関係など、みんな一緒になって野菜作りを行っています。

●保育園やコミュニティ農園での活動は、地域社会との結びつきを深める絶好の機会です。

相続による農地の売却、そして…

●畑は江戸時代から代々つないできたもの。祖父の頃にはうどを作ったり、練馬大根の品評会で一等を受賞しました。昭和7年の賞状が残っています。

●それが、昨年相続が起こり畑の大部分を売却せざるを得なくなりました。気分的にやる気がなくなったというのが本音でしたが、取引先の飲食店の方達からは「頑張って続けてください」というお声をいただいていました。
そんななか、近所に畑を貸してくださる方がいらっしゃったので、生産緑地の貸借制度を利用し、新たなスタートを切ることができました。

●借りた畑のある上石神井という地域は、農地の減少が激しく、今まであった大きい畑がだんだんなくなってく傾向にあります。生産緑地の貸借という制度はありますが、貸し手は多くなく、条件が難しいという課題がまだまだあります。

都市農業ならではの

●取引先の大泉学園のピザ屋さんが、店休日に農作業を月一回ぐらい手伝いに来てくれています。畑を借りた当初から整地もお手伝いいただき、本当に感謝しています。

きじまさん こうして手伝ってくれる方が周りにいるのも都市農業の強みかもしれないですね。

●お店の方が、僕ら都市農業者の野菜を使い、食べてくださるお客さんたちと繋げてくれる。こうした密接な関係が都市農業の魅力の一つで、大きな強みだなと、今回の経験を通じて実感しました。農地自体は減少傾向にありますが、この強みを活かし、皆さんと一丸となって新しい都市農業の姿が作り上げられればと思います。

国分寺市 中村さん
お２人の話から、これからは農家以外にも体験の機会を作るなど、開いていく農業が必要かなと思いました。

MC 小谷さん
畑は土壌が大事ですので、昔は病原菌が入るのを防ぐためなどで人を入れないことが多かったのですが、今、都市農業では、清潔さは保った上で、みんなで耕すという考え方が大きくなっているんですね。

国分寺市 中村さん
次のフェーズに来ているのかなって感じますね。

最後に ＜都市農業のこれからを語り合う＞

MC 小谷さん
過去には「都市農地というのは開発していくべきもので、都市に農地は必要ない」とされた時代がありました。その中でも都市農業を残そうと尽力された先輩農業者の力がありました。
そうした背景を受けて、今は都市農業に対する評価が見直され、むしろ都市に農がある方が豊かな暮らしが築けるという風に見直されている時代だと思います。
一方で、相続などにより都市農地が減少しています。担い手の確保、経営の安定、地域住民の理解促進など、様々な課題もありますが、「都市農業のこれから」について、皆さんの想いを語っていただきます。

練馬区 酒井さん
農地が減ってきて、今ある都市農業の風景、当たり前の風景が当たり前ではなくなってきているのが現状です。地域の皆さんにも都市に農地があることの大切さを実感してほしい。買って、消費していただいて、それから収穫体験で収穫したものを食べてもらうなど、五感に訴えていくことが大事。「収穫から食べるところまで体験ができる」という、都市農業の最大のメリットを皆さんと共有できるように、我々都市農業の農家も頑張っていきたいと思いました。
また、様々な課題があるなか、農家の努力だけでは、農地を残すことは困難になっていると感じます。本日登壇した皆さんの話を聞く中で、地域住民やJA、行政、飲食店、NPO、福祉作業所など様々な方を巻き込みながら、一緒になって、「どうしたら農地を残していけるか」を考えていくことが、これからの都市農業のあるべき姿かなと思いました。

松戸市 成嶋さん
これから都市農業を残していくには、住民の方と農業者の相互理解が必要だと思います。
住民の方に農地があることの大切さ、素晴らしいことだという事を理解してもらうためには、子どもたちへの食育授業や、地元の飲食店に野菜を卸して、食べてもらって喜んでもらうなど、農業者も「知ってもらう努力」を続けていくことが必要かなと思います。

名古屋市 小島さん
名古屋では私たちの地域へ来ると、「どこに農地があるんですか」と質問されます。ですから、我々農協は、ここにブドウの直売所が数軒、こっちに梨、こちらに柿の販売店があるよと情報を積極的に発信しています。
また、軽トラ市を行うなど、地産地消の呼びかけもしています。最初のうちは来場者が2～300人だったのが、この夏は800人を超える方が暑い夏にもかかわらず、並んで買い求めていただきました。情報を発信することで知っていただくことが大切です。
それから、多品目生産、できれば少し単価も高いものを栽培することで農業の継続性を高めることが大切です。後継者に農業を続けてもらう上でも必要な取組だと思います。

京都市 中嶋さん
今回皆さんとお話しして、私がやっている方向性は間違っていないということを確認できました。
また、前日視察に行った一般の市民が参加できる練馬区の農業体験農園が、非常によかったです。体験農園は、早速できるようにしたいなと思います。
もし、この話を聞いていただいている皆さんの中に、京都で農業をしたいという方がおられるようでしたら、ご連絡いただいたら中嶋農園に就職できますので、よろしくお願いします。

国分寺市 中村さん
都市に農業を残すことについて、都市農業振興基本法ができて随分変わってきました。その時に求められたのは「多面的機能」。これが評価されて都市における農業の必要性が高まりました。
現状、多くの農業者は、多面的機能を発揮することが求められていることを理解できていないと思います。今回、皆さんのお話を伺いながら、こういう考え方を少しずつ広げて、期待に応えるような農業をやっていくことが重要だなと感じました。

練馬区 野坂さん
住宅と農業が密接な環境を活かし、様々な方達と連携しながら、これまでのカタチに囚われない新たな都市農業のスタイルを見つけていくことが大事だと感じました。
農地が減少していく現状を踏まえながら、コンパクトな農地でも生産性や収益性を上げていける品目選定など工夫していくことが求められると思います。

きじまさん
都市農業があることは、我々消費者にとって、新鮮な農産物を買えるだけでなく、多面的機能の恩恵を受けられるなどメリットが大きいです。消費者もこのままでは都市農地がなくなってしまうという危機意識を持ち、「農業者を応援する」、「共に残していくには何ができるか」を考え、行動することが重要だと感じました。

5-3. 意見交換会サマリー

日　　時　令和5年11月18日(土)　16:30～18:40
場　　所　ホテルカデンツァ東京　ラ・ローズ
目　　的　全国の自治体・農業者・農業協同組合同士が、知見や経験等を共有し相互に学ぶことで、都市農業の発展に向けた新たな取組につなげる。
参加人数　89名(グループ参加者38名、聴講者51名)

タイムスケジュール

	時間	進行
全体	16:30～16:35	目的・趣旨説明
グループ	16:35～16:40	自己紹介
	16:40～17:45	意見交換
	17:45～18:00	休憩
全体	18:00～18:35	各グループ発表
	18:35～18:40	全体総括・終了

目的・趣旨説明（練馬区 都市農業担当部 都市農業課長）

都市農業・農地は、都市生活をより豊かにするものである一方で、都市農業を続けていくのは簡単なことではない。農業者一人一人が悩みを抱え、課題に立ち向かいながら取り組んでいるのが現実である。

本会を検討する段階で、練馬区内の農業者から、「フェスティバルを、農業を続けていこうと気持ちを新たにできる場にしたい」、「そういう仲間、繋がりを作りたい」、「各地での取組を伺って、自身の取組を考える契機にしたい」といった声があり、こうした声に応える目的で開催に至った。

「何かを決定する」「提言を作成する」といったことではなく、率直に思いを語り合ったり、参加者それぞれの視点からの課題感、問題へのアプローチの方法、それぞれの経験などをお話いただき、共通点・新たな気付きを見つけるきっかけの場としていただきたいと考えている。

グループA

テーマ

「都市農業への理解促進・地域との共生」

グループメンバー（敬称略）

【農業者】（練馬区）西貝洸輝、高橋洋平、（松戸市）成嶋伸隆、（名古屋市）飯田実
【JA職員】（練馬区・JA東京あおば）中川大介、（国分寺市・JA東京むさし）平塚和大
【行政担当者】（練馬区）原井祥宏、（京都市）辻髙志
【ファシリテーター】（株式会社農天気）小野淳
【ファシリテーター補佐】（株式会社流通研究所）松谷宏之

概要

<トピック1>　まちなか農業のメリット・デメリット

ファシリテーター　**都市農業を実践するうえでのメリットとデメリットをどう感じているか。**

- メリットは消費者が近い点で、デメリットは農薬散布や土埃、音などに気をつかう必要があることである。
- メリットは販路がたくさんあることで、デメリットは農薬や機械の音等のクレームのほか、畑周辺の道路を汚すと、すぐに警察から電話がかかってくるなど、周辺への気遣いが求められることである。
- 体験農園や収穫体験なども含めて考えると、労働力の確保がしやすい。一方で、まちなかの農業＝汚いというイメージを持たれることもある。
- 基本的にはメリットしかないと思っている。できるだけ多くの周辺住民に畑に入ってもらい、地域に農地があること＝居住者のメリットと思ってもらえるような発想の転換を促せればと考えている。

●周辺の住民の理解がないと営農は難しい。コミュニケーションを取ることによって解決されることは多い。

●農薬の使用について、理解してもらうには時間がかかるかもしれないが重要なことである。例えば、住民の方が区民農園や農業体験農園等で自ら農作物を育てる体験をすると、それを通じて必要性を理解してもらえることもあるかもしれない。

●農薬散布やトラクターの騒音など、周辺の住環境への配慮を行うことによる負担は、基本的には無くすことができない。
マイナスを減らす努力より、例えば、収穫体験を行い市民を巻き込んで農業を見てもらう、トラクターに乗る体験を楽しめるようにする等、畑が地域にあると住民の皆さんにも良い事があるというように考え方を変えてもらうことで、ファンになってくれている方の満足度を上げていくという考え方が大事になってくる。

<トピック2>　無理なく効果的な情報発信

ファシリテーター　**情報発信は重要である一方、農作業で忙しく時間を確保することが難しいと思うが、どのような情報発信を心掛けているか。**

●庭先直売所で直接顧客と話し、その延長線上で要望を聞いたり、想いを伝えている。SNSは得意でないこともあり、現状は実施していない。

●使用しているSNSは無料であり、休憩中に投稿する程度でも拡散されるため効果は大きいと感じている。

●地域のコミュニティラジオを8年継続しており、即売イベントで声掛けや指名買いがあることからも、大変だが効果は感じている。

●農作業中の声掛けにもできる限り対応し、交流するようにしている。

●畑の前に幼稚園がある。野菜の生育状況を直接見てもらうことも1つの情報発信になっている。

●顧客と直接対話することによるコミュニケーションは密度が高い。売場で話をすれば、新たな顧客となってもらえる確率は高くなる。

●SNSは当初記録のつもりで始めたが、反応があることが面白く続けている。芽が出た写真など何気ない写真でも見る人は多い。興味ある人が増えてきたので、収穫体験の告知などが多くの人に届き効果的である。

●農業者として、消費者に農業を伝えていく使命はあると感じている。

●取材などはメディアの意図と合わないこともあるが、伝えたいことの妥協点を見出すようにしている。メディアでの放映は売り上げにつながるので、取材を受ける側もメディアを利用するという視点を持つことが大事である。

●収穫体験では、収穫だけでなく、袋詰めなどの作業も体験してもらうことによって、出荷までにいかに手間がかかっているかも理解してもらえる工夫をしている。

●収穫体験などイベントの集客にはSNSが欠かせない。継続することで固定客がついてくれる。

●収穫体験をすると、参加したお客さんが自身のSNSで発信してくれる点もメリット。

<トピック3>　農業者と消費者の連携による都市農業の未来像

ファシリテーター　**農業者と消費者の関係性についての理想形や、都市農業・農地の公共的な価値をどのように地域に還元していけるかについて、伺いたい。**

●消費者にも農作業を行ってもらえるような環境を作ることで、都市農業への理解も進むと考えている。

●地域の飲食店で地場産農産物をもっと使用してほしい。地産地消を推進することで、地域住民の理解につながると共に、消費者の声を聞くことにより自身の励みにもなる。ここに農家がいてよかったと思ってもらえる農業を目指していきたい。

●身近なところで生産された野菜を食べること（地産地消）はより新鮮で、輸送コストが掛かっていないなどのメリットがあることを、消費者にも理解していただいた上で選んでいただけるようにできればと考えている。
また、農地は災害時の避難場所になるなど、都市農業が持つ多面的な機能について理解してもらいたい。

●農作業のすべてが消費者にとって、体験・遊びのコンテンツになるテーマパークのようにできると面白いと考えている。消費者が近いメリットを活かし、実際に体験してもらうことで営農上のデメリットも、メリットに変えることができる。

<トピック4>　その他

ファシリテーター　**長期的な視点で、いかにして次世代に農地を残していけるか。**

●相続対策については親と話しにくい面はあるが、関わる人みんなで早期に話し合って残していく方法を模索することが大事である。

●販売、加工を含め、儲かる農業であることが重要であるため、収益性を高めていければ継続性も出てくると考えている。

●継いでもらうには、農業が楽しいことと収益性があることが必要。そのためには、まず自分が楽しく農業を続けることが大事だと考えている。

<全体発表>　意見交換を行っての感想など

●農業者間で共通していることは、地域とのつながりや、消費者とのコミュニケーションを非常に大切にしている点であった。

●皆さんが楽しく、儲けられて、無理なく前向きに営農しているということが印象的であった。

グループB

テーマ

「都市農業への理解促進・地域との共生」

グループメンバー（敬称略）

【農業者】（練馬区）田中秀一、野坂亮太、（国分寺市）清水雄一郎、（京都市）渡邉幸浩
【JA職員】（松戸市・JAとうかつ中央）佐々木貴史
【行政担当者】（練馬区）石森信雄、（名古屋市）河原勝弘
【ファシリテーター】（株式会社流通研究所）大池峻吾
【ファシリテーター補佐】（株式会社流通研究所）岡田寛史

概要

<トピック1>　ファンづくりに向けた情報発信

ファシリテーター　**ファンづくりに向けた情報発信について、どのような取組をしているか。**

●今の時代はSNSでの情報発信が中心だと思うが、毎日更新する人とそうでない人がおり、温度差がある。

●練馬区では、「とれたてねりま」というアプリを開発し、直売所やイベント情報を発信できるようになっている。SNSが得意でない農業者もこのアプリで情報発信でき、地図上に農園が表示される仕組み。

●SNSでは、「枝豆の初出荷」のような、初物の投稿は閲覧数が高くなる傾向にある。また、投稿回数が多い人の方が閲覧数は伸びやすい傾向にある。

●SNSを見て直売所に来てくれる等、SNSでの発信は効果的である。

●京都市は、年5,000万人が訪れる観光地である。そのため、野菜を軽トラックに載せて売りに行く「振り売り」をしていると、観光客が写真を撮影し、SNSに投稿してくれる。自身で発信しなくても、振り売りがコンテンツとなり、情報が拡散されている。

●SNSでの情報発信も大切だが、都市農業では、畑の周りを住民が行き来しているので、看板を立てるだけでも情報発信になる。多面的機能があること等を、ストーリー性を持たせて伝えることも効果的である。

●SNSでの発信が、直接、販路につながりやすい面がある。珍しい野菜を求めている人がダイレクトメールを送ってきて買いにくる例もあった。

●国分寺市では、「こくべジプロジェクト」を推進しており、直売所だけでなく飲食店にものぼり旗が立っていて、まち全体での情報発信ができている。

●SNSを更新したことで直売所のお客さんが増えることもあるので、意外と効果を実感する場面がある。

●SNSでの情報発信は、消費者のニーズがあり、ファンづくりの1つの手法として効果的だということが分かるが、得手不得手が出やすい。直接コミュニケーションを取って、ファンを獲得することも都市農業においては重要である。

<トピック2>　都市農業の多面的機能を活かした理解促進

ファシリテーター　**都市農業の多面的機能を活かした理解促進について、どのような取組をしているか。**

●農業者は多面的機能を理解しているかもしれないが、一般の人には馴染みのない言葉である。農業者が多面的機能を意識して、一般の人に伝えていくことが大切である。時間がかかるかもしれないが、農業者だけではできないことを農協や行政と一緒にやり続ける必要がある。

●農業者が園主として運営する「農業体験農園」では、農地がコミュニティの場となっており、継続していくことで、イベント企画や農作業を手伝ってくれる参加者・核となる人が現れるなど、新しい繋がりが生み出されている。いわゆる区画貸しの市民農園では、できないことである。

●JAの青壮年部は、地域のリーダー的存在を育成する組織でもあるので、青壮年部が積極的に発信して、地域の農業者を巻き込んでいけるとよい。

●住宅に囲まれた農地だからこそできることを考えた時に、食育・教育的な機能を活用しやすいことがあげられる。保育園や小学校の授業の受け入れを行うほか、文化的側面を伝えられるとよい。

●本日、午前中に練馬区内の農業者を視察し、農業を農業としてだけでなく地域の文化として残していかないといけないと感じた。一人だけでの活動では地域全体の理解につながらないため、農業者自身が理解を深め、周りの農業者を巻き込んでいくことがポイントだ。

●より多くの人に理解を深めてもらうために、地域の人を巻き込む仕掛けを考え、農業者、行政、JAが一緒に取り組んでいく必要があると感じた。

●農地視察では、住民に農業への理解を深めてもらうために、実際に農地に足を運んでいただくことが大事であることを実感した。

●視察時の話を聞いていると、練馬区では、若手の農業者がやりたいことを親がサポートしてあげたり、後押しする雰囲気があると感じた。

<トピック3>　多様な連携による取組について

ファシリテーター　**都市農業では、都市という環境を活かし、多様な主体と連携した取組ができる。行政・JAの支援も含めて、どのような取組が可能か伺いたい。**

●私は地域のマルシェ団体の代表を務めている。JAとマルシェの開催場所の調整などをしていることもあり、よい連携体制が取れている。

●練馬区では年に1回、区内のマルシェ団体が集結する「ねりマルシェ」というイベントを何年も継続開催しており、美味しい農産物を購入して、農業者と会話することが文化として定着している印象。都市農業は、子どもから大人まで多くの住民を幸せにするものであり、それは行政として応援する理由の1つである。

●国分寺市では、「こくべジプロジェクト」に取り組んでいる。最初は飲食店22店舗との取組であったが、現在は90店舗以上になっている。地域の大手飲食店やアパレルメーカー等も協力してくれており、小さなまちの中で様々な取組が生まれている。今では、小学校の授業でこくべジについて学ぶため、市民に浸透している。

●連携相手として一番力強いのは地域住民である。都市農業者は生産だけでなく、農地の多面的機能を守るために農業をしており、多面的機能を享受するのは地域住民である。多面的機能を維持するために、地域住民と協力体制が構築できると、好循環が生まれていく。

<全体発表>　意見交換を行っての感想など

●今日聞いた内容は、すぐにでも実践できる取組があったので、地元に戻ってすぐに取り組みたい。

●都市農業者が集まり情報交換できたのは貴重な経験である。定期的に情報交換できれば、都市農業はもっと発展していくだろう。

グループC

テーマ

「都市の特性を生かした営農・販売」

グループメンバー（敬称略）

【農業者】（練馬区）加藤優子、西貝伸生、（松戸市）川上修平、（京都市）中嶋直己
【JA職員】（練馬区・JA東京あおば）岩井則幸、（名古屋市・JAみどり）菅野忠広
【行政担当者】（練馬区）馬場一嘉、（国分寺市）飯塚達儀
【ファシリテーター】（株式会社エマリコくにたち）菱沼勇介
【ファシリテーター補佐】（株式会社流通研究所）松本隼也

概要

<トピック1>　都市農業の意義について

ファシリテーター　**それぞれが思う「都市農業の意義」について伺いたい。**

●住民の方が触れ合いやすい農地が身近にあり、農業を知る機会につながるところに価値があると考えている。

●農と市民（消費者）との距離が近いため、農への理解が広がりやすい点に意義がある。

●市民にとっての農業の窓口になることである。都市農業が窓口となって市民が農業に触れることの先には食料自給率の向上や、市民の農業の理解を深めることにもつながり、結果として農地を守ることにもつながると考えている。

●マルシェでのお客さんとの会話の中で、野菜の食べ方や魅力を直接伝えることができる点にも意義があると思う。

●防災の観点で、災害時には都市農地が地域住民の避難場所の1つになる点も、都市農業の意義と考える。

●緑地保全の側面もある。最近、自分の畑を見た近所の子どもに「ここ田舎だね」と言われたときに、子ども目線からすると畑は自然の一部に見えていることが分かった。その時に、公園だけでなく、畑も緑地なのだと再認識した。

●都市に近い生活環境の中で野菜が採れることを、子どもたちが実際に触れて知り、学ぶことができる点も都市農業の意義だと思う。

●消費者と農業者との「顔が見える関係性」が築ける点に意義があると思う。

●私の地域は「農地が多く、住みやすい」と評判で子育て世代から人気のエリアになっている。こうした環境があることが人を集める要因になっており、都市農業の意義のひとつであると思う。

<トピック2>　労働力について

ファシリテーター　**販路と労働力は深く関連するため、改めてそれぞれの販路について伺いたい。**

●JAの直売所のほか、学校給食やレストラン、スーパーへも出荷。

●4～5店舗のスーパーの地場野菜コーナー、JAの直売所に出荷。

●市内の飲食店や小売店4～5社程度に自社便で出荷。

●JAの直売所と飲食店、マルシェ、百貨店等のほか、量が多い時には庭先直売所で販売。

ファシリテーター　**4名の農業者に現状の労働力について、「問題ない」「やや課題を感じている」「課題を感じている」の3択でお答えいただきたい。**

●「やや課題を感じている」と回答が2名、「課題を感じている」と回答が2名。

ファシリテーター　**次に、給料を支払っているスタッフが「いる」か「いない」か、営農状況について伺いたい。**

●「いる」。自身が農業を続ける意味を考えたとき、後継者を育て農地を継承するためという結論に至り、法人化して従業員を雇用する判断をした。現在、正社員3名、パートが5名いる。長い社員で10年くらいになる方がいる。今後は、雇用人数を10人以上にしていきたいと考えている。

●「いる」。営農の規模を拡大したいが、親との考え方の違いの難しさを感じている。雇用しているパートさんは、取引先の元バイヤーで、青果担当の方を引き抜いたため、調整作業も速く、即戦力で助かっている。今後は、雇用している方の仕事を失くさないためにも、機械化や貯蔵可能な野菜であるさつまいも・たまねぎに力を入れていく。学校給食への安定供給を目指している。

●「いる」。1名雇用している。自分が就農する前からいた方で、何も言わなくても草むしりや種まきなど、自分で主体的に動いてくれる。ただ、高齢になってきており、今後抜けたときが心配である。

●「いない」。援農ボランティアの仕組みを利用している。手がまわらず困っていた時に初めて利用して以来、継続している。

ファシリテーター　**休日取得について、週何日くらい休めているか。**

●季節にもよるが、繁忙期は休みが取れていない。

●子どもの送迎などでは休みを取るが、そもそも休みたいとは思っていない。会社としては有給休暇の制度を設けており、従業員の労働環境は意識して整備した。

●週に0.5～1日は休めている。子どもの送迎で休みを取得することが多い。

●繁忙期外にまとめて取ることや、自分の時間が欲しいときに取ることが多い。今は父と2人でやっており、パートを2名雇用している。自分が休むと父も休むので、自分だけが休むことはできない状況である。

ファシリテーター　**後継者に農業をやりたいと思ってもらうためにも、積極的に休む姿を見せることも重要と思う。また、農業経営において「自分はこうしたい」というビジョンを持つことも重要だと感じた。**

●私は「子どもたちが笑顔になる野菜づくり」をコンセプトにしている。本音では、いろんな品種を生産したいが、高収益化を目指すためにも機械に適した品目に絞る方向になっている。

●自身の農園ではスーパーへの納品も多く、少量多品目生産からは抜け出せない。スーパーへの出荷の場合には出荷調整も負担であり、労働負荷軽減が課題である。

<トピック3>　収益の向上（生産面・販売面）

ファシリテーター　**農産物の単価を工夫して上げた事例等について教えていただきたい。**

●いちごは単価が取れる品目だと認知されていると思うが、自身の営農において価格転嫁できているかはわからない。自園は土耕栽培であり、高設栽培に比べ労働負荷がかかる。それでもこだわって生産しているが、消費者にはその場で食べ比べでもしないと、栽培方法の違いによる味の違いは認知されにくいと感じている。栽培方法等のこだわりや手間が付加価値として訴求できると良い。

●最近、量り売りにすると収益性が向上することに気が付いた。自分で販売したい規格と価格を設定して売れるので、梱包資材、人件費の削減にもなり、単価向上につながっている。

●自分は基本的に、マルシェは儲からないのではないかと考えているが実際にはどうなのか。

●私の場合、マルシェは儲かるが大変である。ただ、儲かるのは農園で、自分の人件費はカウントされていない。出店料はあるが手数料がない点も魅力である。

ファシリテーター　**経費の中で、自身の人件費をどのくらい把握されているか。あまり考えていない方が多いかもしれないが、自分の人件費も意識しながら営農することが重要ではないか。**

●自分は、人件費の計算をして採算が合わなければやめている。最近では、売上げを伸ばすことも重要だが、それよりも生産コストを下げることで利益を確保する方針になっている。

●労働力と収益性の話はリンクしている。労働負荷軽減の面では、いかに作業工程を単純化できるかが重要であり、戦略的に最終的な販路を見据えて取り組む必要があるのではないか。

<全体発表>　意見交換を行っての感想など

●都市農業といっても、地域や営農規模によって違いがあることを改めて感じた。

●今回の意見交換会は、有意義な時間であった。「時間が足りない」と思うくらいあっという間に感じられた。

●都市農業の発展のためにも、今回の取組が1回で終わるともったいないので、次回は別の都市でも開催できることを期待する。

グループD

テーマ

「都市の特性を生かした営農・販売」

グループメンバー（敬称略）

【農業者】（練馬区）酒井雅博、（国分寺市）中村克之、（名古屋市）小島教正
【JA職員】（京都市・JA京都市）荒木俊哉、（京都市・JA京都中央）新谷雅敏
【行政担当者】（練馬区）三浦真吾、（松戸市）田嶋和彦
【ファシリテーター】（株式会社流通研究所）有山公崇
【ファシリテーター補佐】（株式会社流通研究所）饗庭自風

概要

<トピック1>　労働力について

ファシリテーター　**まずは農業者からの興味・関心の高かった労働力について、自身の状況も含めて伺いたい。**

●国分寺市では、援農ボランティアを養成する「市民農業大学」という事業を行っており、そこで農業について勉強した人が5人、週1回来てくれている。一から教える必要がないため助かっている。無償だが収穫した野菜をお土産として渡すなどするようにしている。

●練馬区にも同様の仕組みがある。ボランティア登録した方の派遣については、もっと活用されるとよい。個人的には、無償であると指導がしにくい面があると感じているため、現在は家族だけで管理できるようにしている。

●こうしたボランティアは、しっかり作業してくれる方が長く続けていく印象がある。

●名古屋市では、そのような事業はない。収穫期にパートを手配することはあるが、ある程度収益が出る作物を生産していないと有償のパートは雇えないのが現状である。

●都市農業のメリットは、近くに人がいることであり、助けたいと思ってくれている人も多いと感じている。農業者も多少譲歩しながらやっていくことも必要ではないだろうか。

●京都市でもボランティア事業は行っていない。小規模な家族経営の農家だと、人を雇うことは難しいだろう。高齢で重機が使えなくなっている農家などに対してはJAでサポートし、その後の作業を農家が行うようにしている。

●京都市では今年から、高齢化のなか労働力確保という観点も踏まえ、農福連携に取り組む農家に対する補助金制度を始めたところである。まだ様子見の農家が多いような状況である。

●農福連携のうち、作業をアウトソーシングするような取組では、社会的意義や地域貢献の意識がないと継続が難しいと聞く。

●私は実際に農福連携に取り組んでおり、福祉作業所から4～5人が週1回2時間、農作業に来てくれている。人によって向き不向きはあるが、マンパワーが必要な単純作業は非常に助かっている。作業をお願いする農業者側が、従事する方の適性を見極めることが重要と感じている。

●松戸市でも、労働力不足は課題である。アルバイトなどを採用しても、教える時間がかかったり、アルバイトに向いている仕事を作らないといけないなど逆に苦労する農家もいると聞く。

●私の場合は一人でやっているため、一部を体験農園として民間に貸している。利用者は非常に楽しそうにやっている。体験農園という形態にも、少し追い風が吹いているかもしれない。

●ボランティアの活用や農福連携の話も含め、都市農業は選択肢が広いというのがメリットだが、農家側の依頼のしかたなどによってうまく機能するかが変わるという印象を持った。

<トピック2>　ブランド構築とブランド力強化

ファシリテーター　**営農のうえで、ファンづくりは重要である。個人・農園・組織など様々なブランド戦略があると思うが、経験も踏まえてご意見を伺いたい。**

●いちごパックのデザインを作ったことによって、実際に売上げが上がった経験があり、消費者に訴える重要性はあると感じている。同名の農園との差別化という点でも効果的である。

●農園のロゴなどはパッと見で分かるため、販売面ではよい効果がある。最近はロゴを作る農園が増えている印象である。

●個人で作成する方もいるが、松戸市では、行政でブランドマークを作成してPRしている。

●練馬区では、区公式キャラクター「ねり丸」が区民に認知度があるため、チラシや看板などに活用している。行政が勝手に決めて実行するのではなく、農業者と相談しながら決めていくことが大切だと考えている。

●区が行う広報は、ブルーベリー園の集客などにも非常に効果があり、長年継続してきたことが結果としてつながってきている実感がある。

●JA京都市では、現行のＧＡＰ※制度は個人経営の農家にはハードルが高く、コストもかかるため、独自のGAP制度を設け、安全安心をＰＲしている。

●京都市では「振り売り」という文化が残っていて直売所という発想がないことと、採算の課題もあり市内にJAの直売所がない。ラッピングした軽トラを貸し出しており、定期的に移動販売を行っている地域もある。

●「新京野菜」という新たな品種のブランド化も行っているが、土地柄なのか、新たなものが望まれず、普及への課題も感じている。

●名古屋にも「あいちの伝統野菜」に選定された「徳重だいこん」があるが、JAみどりでは、「名古屋の森のバタープロジェクト」としてアボカドのブランド化にも取り組んでいる。高単価で売れるように形にしていく段階である。

<トピック3>　都市農業の意義・価値

ファシリテーター　**都市農業という立地を活かして何を大事にしていくのか、何が価値と感じるか。**

●都市に農地があること自体が価値である。人口が多く、畑が少ない環境だからこそ、「畑があってよかった」と実感してもらえれば、大事にしようという意識が生まれる。実際に、東日本大震災の発生時、私の畑に避難する住民がいたが、こうした際に価値を実感してもらえるのではないか。「農に対する意識の玄関口」として都市農業があるべきだと思う。

●地元の新鮮な農産物を提供する「地産地消」の推進が大事である。生産者が消費者に直接販売する場や、そこでのコミュニケーションも含めて、求められていると考えている。

●農業者自身が都市農業の多面的機能を理解することが大事である。また、これまでは農地に他人が入ることは避けられる傾向にあったが、これからは「住民に開かれた農地」にしていくことが課題だと考えている。

●体験農園などは人が集まり、地域コミュニティの場ともなっている。

●意義や価値を地域の方にどのように伝えるかが重要である。行政やJAだけでなく、大学と連携し、イベント等の機会を活用して伝える取組を実践している。地域の方々とも同じ方向を向いて農地を守っていけるようにしなければいけない。

●行政内でも、農業部門と建築部門とが足並みを揃えて、同じ方向に向かって応援してほしい。

<トピック4>　その他

ファシリテーター　**持続可能な農業についての意見を伺いたい。**

●有機については、国が推進しているが多くの農業者が意識・理解できていないこと、有機農業について学ぶ場を作っていくことも課題と考えている。大きな組織に加入せずとも、情報を取得できるような、情報発信の仕組みがあると良い。

※GAP：農産物の安全や環境保全、労働安全を確保するための農業生産工程管理の取組。

●有機農業はなかなか難しい面があるが、初めから100%を目指すのではなく、できることから始めて、段階的に進めていくことが大事だと考えている。

<全体発表>　意見交換を行っての感想など

●農業者、JA、行政のそれぞれの立場で活発な意見交換ができ、時間が経つにつれて盛り上がっていった。

●三者の話し合いは非常に大事であると感じた。この場だけで終わらせず、持ち帰って話し合ってほしいし、またこうした機会を持てれば、都市農業の発展につながっていくのではないかと思う。

全体を通した質疑応答

質問①：Cグループ ファシリテーター菱沼さん

都市農業の弱点が見えた部分もあると思う。売上げを上げようと思えば上げることができるが、そのことで労力が増えてしまう。コストやプロセスをシンプルにすることに目を向ける必要があるのではないかということを感じたのが感想である。

質問として、複数のテーブルから次の情報交換を進めるべきではないかという意見が出されていたが、その予定はどのように考えているか。

回答①：練馬区都市農業課長

農業者、JA、行政が一堂に会する意見交換は初めてであったが、各テーブルで活発な議論が行われていた。

この場で、今回のような意見交換会を今後も続けると宣言することはできないが、皆さまの声を形にする努力をしたい。引き続き、各都市の行政担当の方が窓口となっていただき、次の形を模索していければありがたい。

質問②：練馬区農業者

今回参加しいろいろな意見を持たれたと思う。農業者の方に、都市農業の未来について伺いたい。

回答②：Bグループ 清水さん

国分寺市は、今回参加した自治体の中では規模が小さいが、都市農業に関しては市民に非常に応援してもらっている街であると認識している。消費者には、体験や楽しさ、次世代への食育などを求められることも多い。それ以外にも、食文化を含めた伝統の継承も必要である。

都市農業はいろいろな人と交流して新しいことができるし、これまで引き継がれてきたものを守っていくという面もある。だからこそ、いろいろな人に応援してもらっていると思う。農業の未来は明るい。

いろいろな経営があるが、行政やJAに助けてもらいながら、こうした集まりを今回だけでなく続けていきたいし、続けていかなければならないと感じた。

5-4. フェスティバルの広報

(1)農業者協力ポスター

区内農業者121名の協力を得て、全11種類のポスターを制作しました。令和5年6月14日以降、農業者の運営する直売所等(約170か所)やJA東京あおばの直売所、区立施設に掲示。フェスティバルの開催を周知するとともに、練馬区で営農する農業者の皆さんを広く知ってもらう機会となりました。

(2)さまざまな広報の展開

令和5年10月4日以降、区内農地やJA東京あおば本支店、区立施設、公設掲示板等においてキービジュアルを活用したポスターの掲示を開始しました。また、のぼり旗や駅広告などにより本キービジュアルを活用した周知を展開しました。

駅広告

アドピラー(柱巻)
練馬駅・光が丘駅・池袋駅
期間:1週間〈11/13(月)～11/19(日)〉

ポスター
区内・区周辺27駅
期間:1週間〈11/13(月)～11/19(日)〉

ホームドアステッカー
練馬駅・光が丘駅
期間:4週間〈10/23(月)～11/19(日)〉

左　:西武池袋線池袋駅アドピラー(柱巻)
右上:西武池袋線石神井公園駅ポスター
右下:都営大江戸線練馬駅ホームドアステッカー

練馬区役所本庁舎

アトリウム　フォトスポット
期間:8/10(木)～11/19(日)

やすらぎ歩道橋
期間:8/15(火)～11/19(日)(壁面囲いは10月31日から設置)

全16種類の吊りバナー掲示と、壁面囲いのラッピング装飾

区役所2階通路掲示
期間:10/31(火)～11/19(日)

デジタルサイネージ

・練馬区役所（アトリウム・2階入口など）
・区立施設（区民事務所・区立図書館）
・ココネリ
期間：10/12（木）～11/19（日）

区役所アトリウム

ココネリ

フェスティバルのPR動画を放映

光が丘IMAと連携した広報

フラッグ掲出
期間：11/1（水）～11/19（日）

光が丘IMA周辺の街路灯にフラッグ42枚を掲出

光の広場 パネル展示
期間：11/19（日）

「ねりま推し」事業および「練馬の農業いま・むかし」※のパネル展示

デジタルサイネージ（光の広場・IMAストリートなど）
期間：10/30（月）～11/19（日）

※「練馬の農業いま・むかし」（発行：練馬区総務部情報公開課）

令和５年９月に、練馬区の都市農業の変遷を紹介する冊子を作成し発行しました。フェスティバル当日、光が丘IMA内の光の広場では、冊子に掲載の区が所蔵する歴史的写真のパネルを展示し、会場へ向かう人々の関心を集めました。

関係団体の広報誌

「産連ニュース」
令和５年９月号
（一社）練馬産業連合会

表紙に掲載

「広報誌あおば」
令和５年10月発行
JA東京あおば

特集ページで紹介

（3）SNSでのPR

令和５年２月１日にX（旧Twitter）およびインスタグラムのアカウントを開設。フェスティバルを周知し、関心を高めることを目的に投稿を行いました。

〈主な内容〉
・イベント情報周知、イベント出展告知
・直売所情報の発信　　・企画「美味い！俺が作る推し野菜」
・農業者情報の発信　　・区内農業者によるカウントダウン

「美味い！俺が作る推し野菜」

フェスティバル実行委員会実務検討部会員である農業者の皆さんの協力のもと、実行委員会事務局職員が農作業を体験。種まきや定植、収穫などの作業過程や、農産物を育てる際の工夫や知恵を発信しました。収穫した野菜を農業者おすすめの方法で調理する「推しメニュー」も紹介しました。

種まき

定植①

定植②

収穫

袋詰め

調理

「フェスティバルまであと○日！」（カウントダウン）

農業者の皆さんの協力のもと、フェスティバル開催の100日前から毎日、カウントダウンの投稿を行いました。

5-5. 委員名簿

※委員は令和6年1月現在
※敬称略

(1) 全国都市農業フェスティバル実行委員会

役職	氏名	所属団体等	所属団体役職等
会長	前川 燿男	練馬区	区長
副会長	宮下 泰昌	練馬区	副区長
委員	野﨑 啓太郎	東京都農業協同組合中央会	代表理事会長
委員	久保 秀一	東京あおば農業協同組合	代表理事組合長
委員	尾崎 賀一	練馬区農業委員会	会長
委員	井口 薫	練馬産業連合会	会長
委員	石塚 康夫	東京商工会議所 練馬支部	会長
委員	加藤 政春	練馬区町会連合会	会長
委員	湯澤 将憲	国土交通省	都市局 公園緑地・景観課 緑地環境室長
委員	高橋 正智	農林水産省	農村振興局 農村政策部 農村計画課 都市農業室長
委員	築田 真由美	東京都	産業労働局 農林水産部長
監事	小川 善昭	練馬区商店街連合会	会長
監事	後藤 俊一	練馬区	会計管理室長

(2) 全国都市農業フェスティバル実行委員会実務検討部会

役職	氏名	所属団体等	所属団体役職等
部会長	西貝 伸生	東京あおば農業協同組合	練馬地区青壮年部 (農業者)
副部会長	田中 秀一	東京あおば農業協同組合	石神井地区青壮年部 (農業者)
副部会長	高橋 洋平	東京あおば農業協同組合	大泉地区青壮年部 (農業者)
部会員	洒井 雅博	全国農協青年組織協議会	副会長(農業者)
部会員	西貝 洸輝	東京あおば農業協同組合	練馬地区青壮年部 (農業者)
部会員	野坂 亮太	東京あおば農業協同組合	石神井地区青壮年部 (農業者)
部会員	加藤 優子	東京あおば農業協同組合	大泉地区女性部 (農業者)
部会員	中川 大介	東京あおば農業協同組合	地域振興部 農業振興課長
部会員	田中 静雄	練馬産業連合会	事務局長
部会員	安藤 薫	東京商工会議所 練馬支部	事務局長
部会員	小杉 正明	練馬区商店街連合会	事務局長
部会員	吉田 法仁	一般社団法人 練馬区産業振興公社	ねりま観光センター センター長
オブザーバー	今成 瞬	西武鉄道株式会社	沿線価値創造本部 事業創造部 沿線価値深耕担当 課長
オブザーバー	石原 遼太	西武鉄道株式会社	沿線価値創造本部 事業運営部 ステーションリテール担当 課長
事務局アドバイザー	斉藤 睦	練馬区	専門調査員
事務局長	生方 宏昌	練馬区	都市農業担当部長
事務局次長	岡村 大輔	練馬区	都市農業担当部 都市農業課長

主　催　　全国都市農業フェスティバル実行委員会／練馬区

後　援　　東京都農業協同組合中央会／東京あおば農業協同組合／練馬区農業委員会／
(一社)練馬産業連合会／練馬区商店街連合会／東京商工会議所練馬支部／
練馬区町会連合会／国土交通省／農林水産省／東京都／練馬区議会／
(一社)練馬区産業振興公社／都市農地保全推進自治体協議会

協　力　　ホテルカデンツァ東京／西武鉄道株式会社／国際興業株式会社／
(株)新都市ライフホールディングス／(福)あかねの会／朝日信用金庫

発 行 日　　令和6(2024)年3月

発　行　　全国都市農業フェスティバル実行委員会(練馬区都市農業担当部)
〒176-8501　東京都練馬区豊玉北六丁目12番1号
電話03-3993-1111(代表)

デザイン　　(株)ムーブエイト

印　刷　　(株)金精社

本記録集は、練馬区公式ホームページにも掲載しています。